282
27

始

早稲田の栞

早稲田大学ハ学問ノ獨立ヲ全ウシ学問ノ活用ヲ效シ模範國民ヲ造就スルヲ以テ建学ノ本旨ト為ス

早稲田大學編纂

早稲田大學創立三十年記念祝典の際歐米諸大學より寄せられたる祝詞

282-27

内容

早稲田昔噺　高田名譽學長……一
早稲田大學教旨　故大隈總長……三二
內容充實の時代　高田名譽學長……三八
大學の起原と使命　鹽澤學長……四七
學苑の計畫　平沼前學長……六三
早稲田大學敎職員……七二
早稲田大學校規……九一
早稲田大學々生心得……九九
故總長を追懷して早稲田學園の前途に及ぶ　高田名譽學長……一〇三
故大隈侯爵と其二大競爭者　高田名譽學長……一二〇

大正
11. 4. 6
内交

帝國圖書館藏

早稻田昔噺

早稻田大學名譽學長　法學博士　高田早苗

一　改造と過去

今日は此學年最初の科外講演を開かれるといふことで、私に出て何か諸君に御話をするやうにと主任内ケ崎教授よりの御誘ひを受けた。如何なることを述べたら宜からうかと段々考へて見たが、むづかしい理屈は、諸君が平生正科で學びつゝあり習ひつゝあられる。尚ほ其上にむづかしい事を繰返されると云ふのも、餘り諸君の喜ばれる所でもなからう、のみならず諸君の利益とも思

はれない。科外講義なるものが折節此早稻田學園に於て催されるが、其れは、學生が教場に於て得られない種類の知識を科外講演として諸君の耳に入れたいと云ふのが蓋し學校當局者の考であるに相違ない。それならば講義外のもので何か寧ろ話をしてよからう、どう云ふ話をしたらよからうかと色々考へて見た所、諸君が知らなければならないことであつて、同時に又私が述べるに最も適當なことは、此早稻田學園の昔噺其物であると、斯樣に私は思つた。

一體早稻田學園と云ふものは恰度來年で四十年になるのであるが、其四十年の間に、兎に角此の如く發達をしたものであるから、其事を述べるとなれば隨分種はない譯ではない。又諸君が此學校へはひられた以上、殊に本年は高等豫科に於ても高等學院に於ても多數の新入學者が見えたやうであるが、其方々が此學園に來られたる以上、此所に學ばんと決心された以上は、此學園の如何なる發達をなしたものであるか、過去に於て加何なる歷史を有つて居るものであるかと云ふことを知らずに濟ませる譯にはどうしても行かないのである。是は諸君が義務として一應耳に入れて置かなければならぬし、又それを耳に入れて置くと自ら此學園を愛する所の心、愛校心と云ふものを起さゝる譯には行かないこととなる。斯う考へて見ると、私がこれよりして早稻田の昔噺をすると云ふことは、必らずしも徒ら事ではないやうに考へられる。

併しながら、昔噺などと云ふものは、蓋し諸君には餘り歡迎されないことだらうと思ふ。此頃は社會改造の時代で、總て新しくなければいかぬ時代である。諸君も亦新しいことを要求して居られる時であつて、昔噺といふと甚だ時代錯誤だと思はれる方もあるか知らぬ。けれども夫は決してさう云ふ譯のものではない。私は此頃頗る閑散であるから、時間を消す爲に頻りに繪畫を玩んで居る。繪畫を玩んで居ると言つて自分で描く譯ではないが、掛物などをひろちやくして樂んで居る。隨つて繪畫に私は趣味を持ち、又繪の話を屢ゝ聞くことがある。先年、內閣にはひつた時分に、貴族院に於て、此の繪畫敎育の方針といふことについて痛く苛められたことは、今尙ほ記憶に新たである。どういふ事であるかと云ふと、其中の或議員が、一體此頃は國體上看過する事の出來ぬ畫の描き方が流行する。例へば山水を描くに、山の中に主山といつておもな山がある、之を譬へて見ると、國家に天皇おはすが如きものである。此山の中に主山のない繪を描くといふことは、國體紊亂の甚しいものであるといふやうな議論をして、私を大いに困らしたことがある。其時に私は答へて：：：：それも一應は御尤もである：：：：御尤もであると言はないと仲々承知しないから先づ一應は御尤もであるといつた。けれども一體繪畫と云ふものは古いがよいといふばかりのものでもあるまい、又新しいばかりがよいといふものでもない。何事でもさうであるが殊に繪畫の事になると舊法を學んで新意を出すと云ふ事が必要である。學ぶのは古い法を學ぶ、少しも異論はない、古い法を學ぶは宜いが、古い法ばかり學んで、古人の眞似ばかりした日には

少しも進歩と云ふことはない。で宜しく此舊法を學んで、手腕を造つて、其手腕の上に新意を加へ、新味あるものを書く、是が最も健全な方針である。私は文部大臣として繪畫の事には此方針で導く積りである……と、斯う答へた。是は繪畫の話であるけれども、決して繪の事には限らない。何事でも皆それである。今日の事總てそれである。改造をしなければならぬと言ふ、無論悪い事を改める必要がある。新しい事は宜しい、けれども新しい事といふのは古きが上に或物が加はつて居る事である。ジョン・チスュワート・ミルの説の如く、進歩とは保守に或物を加へたものである。過去の人間の努力が集まつて出來上つたものが現在の世の中である。之を知つて、其上に或物を加へて行けばこそ始めて進歩といふことになる。だから新しい事を欲求するのは至極尤もな事であるが、新しき事をなさんとするには先づ古き事から學んで掛らなければならぬ。舊法を學んで而して後に新意を出さなければならぬ。是れが間違ひない方針であらうと思ふ。

私は一つ掛物を持つて居る、何も此所で掛物の自慢をする譯ではないけれども、話の順序としていふが、掛物を一つ持つてゐる。日本で最も有名な畫家であつた雪村と云ふ人の描いたものである。雪舟雪村と云へば相並んで日本の繪師の中で最大家と申して宜い位なものである。瓜を畫たい小さな掛物である。是は近代の大家と言はれた橋本雅邦先生が珍藏されてゐたのを、私が讓受けたのであるが、此繪を或鑑定家に見せると、之は素人が描いた繪だ、こんなものは買つてはいけないと云ふ忠告を受けた。それから、或時、雅邦先生の高弟である、有名な下村觀山といふ畫家に見せると、是は結構なものである。私が雅邦先生に就いて學ぶ時に、雅邦先生が之を始終示されて、凡て繪と云ふものは先づ斯う云ふものである。此繪のよいことを君が感得すれば、必ず立派な大家になれると言はれた。是は教を受けた最も大切なる教科書であると答へた。兎に角面白い、そが卽ち問題を解決する材料になる。或人が見ると子供が描いたやうなものである、或人が見ると天下の名人が描いた最上々のものである。而も橋本雅邦の如き大家がさう認める。そこだ。子供の描いた者と名人の名畫とは殆ど似たものである。唯子供の描いたものは、舊法を學ばないで、無邪氣に筆を動かしたものである。名家の描いたものは舊法を學び學んで而してそれをすつかり忘れてしまつて子供の如き心になつて筆を落したものである。だから名人の繪は子供の繪の如く子供の繪は又名人の繪の如くであるが、實は名人と子供とは言ふ迄もなく霄壤千里の差があると思ふ。その所をよく心得なければならぬ。新しいことは宜しい、新意を出さなければ世の進歩はないが、先づ此舊法を學ぶと云ふことが何より大切である、卽ち昔噺の最も必要なる所以はこゝに存すると、勿體をつけて、是から主題に入らうと思ふ。

二　早稲田大學創立の事業

東京專門學校と小野梓先生

第一に述べなければならぬ事は、早稲田大學と云ふもの、昔は東京專門學校と言つたのだが、是は何故に明治十五年十月廿日に出來たのであるか、何の必要あつて世に生れたのであるか、どう云ふ理由があつて出來上つたのかと云ふことである。是に就ては事實上の原因が一つ主義上の原因が一つ、斯う二つある。先づ事實的の原因から述べて見ようが、是が發端となるべきものは、小野梓と云ふ人と高田早苗と云ふ人と懇意になつたといふことから始まる。大隈侯爵は固より是れは別物である、兎に角此二人の一人は其時分の青年政治家、一人は大學にまだ在學して居た青二才、此の二人が交を結ぶことになつたといふことから原因した。明治十二年十三年十四年と云ふ頃の日本の天地は、大隈伊藤の人々が支配して居つた天地である。卽ち西南の戰爭に次いで、傷ましくも大久保內務卿は兇刄に掛つて仆れてしまつた。其跡の內閣の中軸は大隈重信、伊藤博文、山縣有朋と云ふ樣な人々である。而して他は皆薩長藩閥だが、大隈重信なるものは藩閥以外の人である。それが原因で黑田淸隆、此人が橫暴を極めて開拓使拂下事件と云ふ問題が茲に起つた。夫れが動機となつて大隈侯は藩閥の橫暴を押へるには議會を開かなければならぬといふことを進言された。まさかさう云ふ言葉ではないが、其意味の事を唱へられた結果、寄つてたかつて大隈侯爵を內閣から追出した。維新の始から、表面は本戶、西鄕、大久保であるけれども、事實は大隈侯伊藤公の如き敏腕な青年政治家が政治を取つてゐたのだ。內閣になくてならぬ人であるけれども、其爲に大隈侯は野に下ることになつた。其野に下る少し前から、矢張り政府部內の人であつて大隈侯を輔けてゐた人才に小野梓と云ふ人があつた。此人は、土佐の宿毛と云ふ所から出た青年で、弱冠にして英國に學んで法律經濟の知識を獲得し、歸つて大隈侯に見出されて、其時分一等檢査官といつて、今の局長所であるが、それよりも大いに權威のあつた地位に置かれて、兎に角三十になるかならぬと云ふ青年で、顯要の地位を充たして居つた。此青年政治家に當年廿一ばかりの、何も分らない、東京大學の政治科の生徒の高田早苗といふ者が知遇を受けて、君達の仲間を連れて來い、さうして君達は學校で習つた事を俺に話せ、俺は又世間の話をしてやるといふので、茲に一つの會合が出來た。それは小野梓氏の橋場の別莊で出來た、其別莊は鷗の渡と云ふ所にあつて此會合を鷗渡會と名付けた。そこへ私が友人を連れて行つ

て始終話を聞いたりしたりしてゐた。

其の間に前に述べた大隈侯の辭職といふことが起つた。玆に世の中は一變して、其前から自由黨と云ふものが出來てゐたが、續いて秩序ある進歩といふことを標榜して改進黨と云ふものを小野梓其他の人々が大隈侯爵を助けて組織することになつた。其中に我々が大學を卒業して政府の人となる事を好まぬと云ふことになつた時に、恰度現在文科の教室、此教室の半ばだけの建物が前から出來て居た。どうして出來て居たかといふと、大隈侯爵の嗣子に大隈英麿といふ人があつて天文學を修めて西洋から歸つて來られた。大隈侯爵と云ふ人は昔から教育に熱心な人で、佐賀に居られる時でも長崎に居られる時でも學校の世話を燒き、自ら教へられたこともある位の人で息子が歸つて來たら一つ學校でも始めようといふので、何となく文科の建物の半ばを造つて置かれた所が、今の妙な關係から、恰度六七人の大學を卒業したばかりの人間がそこに居た。而して大隈侯小野梓先生の下に立つて仕事をしたい、働きたいと云ふものが出來た。而も夫れが政治學經濟學法律學を修めた人だといふ所から、大隈侯は大に喜ばれて、君がさういふ考なら、あすこに建物があるから、あすこで學校をやれ、オレが助けてやる。小野さんが總て世話を燒かうといふことから、遂に此學校が出來た。斯う云ふ譯である。是が卽ち今日の早稻田大學なるもの出來た事實的原因で、極めて簡單なものである。

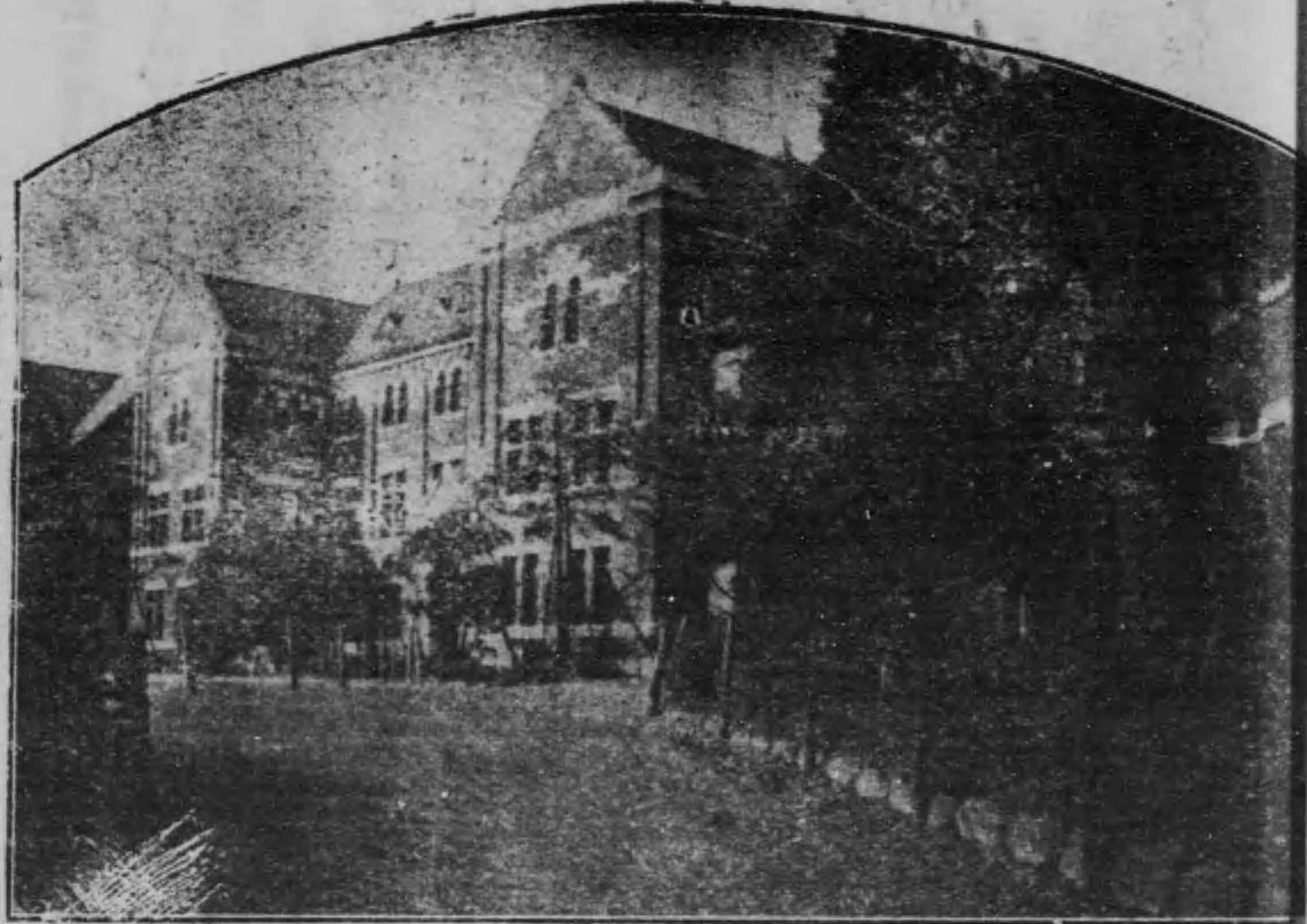
三　建學の本義

そこで一の學校が出來たが、學校が出來れば主義主張がなければならぬ。其主義主張は豫て大隈侯爵が抱懷されて居た所のもの、而して小野梓先生が大隈侯爵の敎を奉じて且つ自らも、是でなければならぬと平生考へて居られた所のものが、卽ち學問の獨立と云ふ文字に書かれて、此新しく出來た東京專門學校の主義主張となつた。學問の獨立といふはどういふ事であるか、是は卽ち早稻田大學の根本主義である。誤解があつてはならぬから、こゝに證據品を提出して、其最も間違ひない解釋を諸君に述べようと思ふ。其れは二册の書物である。一は此學校を大學にした時分の記念錄、早稻田大學開校東京專門學校創立二十年記念錄である、一は此學校に理工科が出來て綜合大學の實を擧げた所の創立三十年の紀念錄である、題して創業錄と云ふ。創業といふはこの學校は何時までも創業だ、大いに前途があるからといふ所から名付けたことである。此二つは圖書館にあるから閑の時に御覽になるが宜いが、其中に今述べた學問の獨立といふ事の證據品がある。是は此學校の開校式、明治十五年の十月二十日、卽ち今から三十九年前に小野梓先生が演說をされた原稿である、先生が自分の筆で書かれたものである。此中のごく必要な部分を抄出しよう。

『大隈公嘗て梓に語つて言へるあり、曰はく、「我邦學問の獨立せざる久し、而して其未だ獨立せざるものは職として學者に與ふるに名譽と利益とを以てせざるに由る。是を以て今の時に當て我が政府は森林を擇んで之を皇家の有に歸し、皇家は其收益を散じて之を天下の學者に與へ、之をして終世學問の薀奥を講究するの便を得せしめ、以て學問を獨立せしめざるべからず」と公の言ふ所實に善し、天下の學者宜しく公を德とすべし』。（下略）

是が先づ學問の獨立と云ふ事の一の意義である。

『而して予を以て之を見れば、夫が外國の文書言語に依て我子弟を教育し、之に依るにあらざれば、高尚の學科を教授する能はざるが如きは、又是れ學者講學の障礙を爲すものにして、學問の獨立を計る所以の道にあらざるを知るなり。夫れ人類の智力は限あり、萬象の學問は窮なし、限あるの智力を以て窮なき學問を講ず、始終これに從事するも猶ほ且つ足らざるを覺ゆ。然るを今外國の言語文書に依つて之を教授せば之が子弟たるもの勢ひ學問の實體を講ずるの智力を分て、之を外語の修習に用ひざるを得ず。以て大に有用の時を耗ひ、中途爲めに講學の勢力を疲らし、所謂諸學の薀奥を極むるの便利を阻碍するに至らむ。是れ豈に學問の獨立を謀る所以の道ならむや。願ふに皇家を輔け天下の學者を優待するは内閣諸氏の責なり、唯其障礙を鋤き、學者をして學問の實體を講ずるの力を寬ならしむるものに至ては、在野の人と雖も亦た其責を分たざるを得ず。而して本校の邦語を以て專門の學科を教授し、漸く子弟講學の便を得せしめんと欲するが如き、蓋し其責を盡くすの一ならむ』。



恩賜記念館全景

即ち此大隈侯の言とせられたのは少し語つて審かならぬとがあるが、「學問は學問として學ばなければならぬ、學問の目的は眞理の自由研究にある、それには學者が獨立しなければならぬ、學者を獨立せしめるには學者が食へるやうにならなければならぬから、天下の山林を帝室の有にする。此時分には帝室御所有の山林は極まつて居らなかつたと見える、夫を皆帝室の有にして帝室から學者に金を下さる。兎に角大

膽な面白い者と思はれる。さうして學者をして後顧の憂なからしめて學問を獨立させなければならぬ。卽ち學問を學問として、眞理を眞理として、他の拘束を受けずに研究させる。是が學問の獨立と云ふことの第一義なることは論を俟たぬ。

も一つ小野梓先生が是に付加へられたのは、其は其時分の學問の事情を知らなければ分らぬ。其時分は日本語では一切專門學は出來なかつた。私共は決して日本語ではやらなかつた。一の學術上の言葉に對して日本語は出來て居らなかつた、卽ち學術語科語と云ふものは殆どない。日本語で著した著述といふものは一つもない。我々は今の中學に相當する學校に居た時代から、西洋人に就いて居た。大學に入つても西洋の書物で敎を受ける。日本の留學生が西洋から歸つて來て敎へて吳れても、其留學生は西洋の書物を以て自分で英語を使つて敎へたと云ふ譯である。小野梓先生が、是れでは迚もいけない、日本人としては日本語で學問が出來るやうでなければならぬ、今の有樣では、結局是は學問上外國の奴隷たるが如き譯であると、斯う思はれて、是を以て學問の獨立の一つの意義とされたのである。

それから茲には言つてないがもう一つの意義がある、詰り學問の獨立には三つの意義を確に含んで居る。もう一つの意義は如何なる事かといふと、其時分はまだ世の中が今日の如く開けない、政府の權力が極めて強いから、政府が學問に干渉する、政府は都合に依つて學問に干渉する。是があつては眞理を眞理として研究することは出來ないのは勿論だ。卽ち其當時の東京大學の如きは既に政府の手が加はらんとして居る、帝國大學と名を改めては益々政府の力が加はつて、政府の權力が之を左右すると云ふ有樣であつたから、さうなつてはいけないから、獨立不羈に政府者から離れて學問を自由に研究しなければならぬ、といふことが、是は茲には言つてないが、事實に於て一番強い意義を其當時に於てなしたものと斯う見なければならぬ。卽ち早稻田大學の根本的金科玉條として諸君が仰がなければならぬ學問の獨立、其內容、其意味は、以上三つの事が含まれて居ると云ふことを、諸君が忘れざらんことを深く希望する次第である。

四　小野梓先生

そこで小野梓先生のことを述べたから、此先生の事を極く簡單にもう少し付加へたい。既に述べた通り、小野先生は、年若うして英國に留學し、歸つて大隈侯に知られて、それで重要な位地に立つたが、幾干もなく大隈侯と共に辭職し、野に下つて立憲改進黨を組織し、暫くして肺病に罹り、四十になるかならぬ身を以て遂に此世を逝られた。其壯健な時には此學校に一週間に一度位は來られて自から講義をされ、終には其時分最も大切な條約改正論を、此講堂に立つて血を吐きつゝ、講義をしたといふが、間もなく此偉人は逝去された。極く若くて死んだ人である。併し小野

先生は、私らが今に於ても頗る欽慕して居る人であつて、誠に偉い人であつたと思ふ。東京大學に於て、多數の先生に教を受け、別段小野先生からは學問の教を受けたことはない、世間的の知識を授けられたのみであるが、併し乍ら、どの先生よりも、今尙ほ此人を忘れられないといふ程人に感化を及ぼし、人を魅する、善良な意味に於て魅する力を有つて居た人である。

更に、此小野梓先生の誠に感服すべきことは、無論自ら政治家を以て任じたのであるが、先生は Politician と云ふ、今日世間に箒で掃く程ある Politician といふ者を以て決して滿足しない、之を陋とし、之を卑んで、我は Statesman なりといふ此大見識を有つて、のみならず此修養を十分にせられた人である。晝は立つて公衆に向つて演說をする、夜は筆を執つて著述をする、彼の有名なる國憲汎論を始として、短い生涯に頗る著述が多かつた。議會が開かれたら議會壇上に立つて大に雄辯を奮ひ、國家に貢獻しようと思つて居られた。斯う云ふ詩がある。

欲レ暖猶寒節序遲。朝々屈レ指數二花期一。花期未レ到意先到。爲賦二墨江春色詩一。

是れは今でも世の中に遺つて居るが、卽ち議會開設と云ふことを夢の間も忘れずに待焦がれて居られた詩である。然るにその開設を見ずして逝去された人である。卽ちステーツマンと云ふものは今日の世界、殊に日本に於て乏しい、皆ポリチシアンである。政治屋であつて政治家ではない、主義方針を立つて之を實行すると云ふ眞の意味の政治家は極めて少ない、何時も盛んなる時代には、西洋でも支那でも此政治家といふ本當の意味のステーツマンが數多現はれる、さういふ人は唯政治其物に於て名を著すのみならず、學問界文學界何に於ても、亦必ず其名を著して居る。グラッドストーンは下院に立つて徹宵大演說を試みる、其暇にホマーの研究に沒頭したといふことは諸君御承知の通りである、デスレリーは雄辯高談四隣を驚かしたけれども、家に退いては政治小說を書いて多數の名小說が世に現はれた。佛蘭西の人傑であつたギゾーは文明史を著して居る、チエールには佛蘭西史の大著述がある。支那の歴史を見ると司馬溫公の如き大政治

恩賜記念館壁銘

恩賜記念館正面入口の壁に揷入したる大理石に刻したるもの

家であつて、資治通鑑の如き大著述をして居る。我日本に於ても我々の尊崇する大隈侯の如き、一方に於ては、あの通り始終政治を離れず國民を指導されると同時に、大著述が數多世に現れて居るといふ如き、是れが卽ちステーツマンのステーツマンたる所であつて、眞の政治家は斯くあらねばならぬ。小野梓先生は卽ち其如き人であつた。此人今や亡し、實に殘念な事である。小野梓先生が健康な身體であるならば、今私が諸君に向つて演說をする如く、今日只今でも此壇上に立つて演說が出來るのに、其人今や亡し、甚だ悲しむ可きことである。

玆に『鴻爪痕』と云ふ書物がある、是は我國郵便の創始者日本のローランド・ヒル、此學校の前の校長前島男爵の事蹟を書いたものである。前島男爵が亡くなられて丁度滿一年、之を見ると、前島男爵が小野梓先生を歌はれた詩が載つて居る。前島男爵は小野先生の先輩である。先輩でありながら心を傾けて小野先生の力を認められた人である。玆に「東洋遺稿に題す」と云ふ詩がある。

題二東洋遺稿一

東洋小野梓。其名四方聞。惜哉半二其業一。追レ仙入二白雲一。人謂二悲歌士一。激烈忘二其身一。安知二温與レ恭接レ物極二是仁一。人謂說二民利一。專二念斯權伸一。安知二尊王志。至誠帝恩臣。精理論二財政一。立レ算闡二微分一。人謂壯齡儒。翩是老吏人。容貌反二其性一。想像憶二其眞一。請作二君傳一者。寫レ眞須二是勤一。浮生半夜夢。誰占百年春。嗚呼君逝矣。千載遺二斯文一。

是れは前島男爵が小野梓先生を歌はれた詩で、先輩の人が此の如く追慕された人であるのを見ても、小野梓先生の偉人なることは自ら分明であると言はなければならぬ。

五　創立當時の學校の規模

そこで學校は今のやうな譯で出來たが、其時分の東京專門學校の規模はどうであるか。建物としては現在の文科の教室の半分、而して生徒が八十名、教師は六名若くは八名、そこで地面は恰度恩賜館の半ばまで、今大隈侯銅像前の芝生から理工科の方はずつと高い岡があつて、そこには茶が一杯に植ゑてあつた。此左右には田面が見え、家は一軒もなかつた。見渡す限り茫々たる稻田と茗荷畑であつた。此學校の出來た時分には今の大隈邸は侯爵の別莊であつた。其大隈邸の二階に私は寄宿をして居たが、雪が降るとそこへ雁が飛んで來て、其の雁を鐵砲で打取つては、晩食の時の肴にしたといふ位な光景であるから、此早稻田の田舍たることは推して知るべく、今日は殆ど其面影を留めない。隨つて我々始め教師先生の俸給の如きは先づ三人が專任で、三人が兼務で此兼任の人は辯護士をやつて居た。專任たる我々は三十圓の俸給で一週に卅時間働いた。さう

して兼任の人は十五圓の俸給で、日本橋邊りからやつて來たのだが、偖其やつて來るのに一人で一挺の人力車では金が掛るからといふので、二人乘の人力車でやつて來たものである。私の如きは自分で拵へた絹の着物といふものは一枚も持たないから、母の八丈の着物を自分の着物にして着て居つた。さうして人に向つて是はボロだと言つて自慢をして居た。ボロとは母の衣と書くからである。さう云ふ有樣が當時の東京專門學校の有樣であつた。さう云ふ風で先づ二十年をボツボツと經過した。

六　苦心慘憺たる二十年間の經營

二十年といへば餘り短い歲月ではないが、話を端折る爲に二十年一足飛とした。玆に二十年を經過した。其中段々學校も賑かになつて、千人近くの生徒を包擁するやうになつた。處が此間の政府の壓迫と云ふものは夫は實に酷いもので、非常な壓迫であつた。卽ち政府は此學校を以て昔の西鄕隆盛が鹿兒島に設けた私學校の如く、あれは尙武的の學校、これは文治的であるけれども物騷の差は同じ程度のものであると斯う見た。其故に出來得る限り色々苛めたのである。或る時の如きは法律科の先生を殘らず取られてしまつて一人も居なくなつた爲に、法律科が潰れんとしたから、私がよんどころなく四方に奔走して、其當時反對黨であつたが、過般京橋で選擧を爭つた關直彦と云ふ人、あの人を始め同學の人を引張つて來て一時敎へて貰つたと云ふやうなことで、其一事を以ても政府の壓迫の强かつたことが分る。是は卽ち改進黨の玉子、政黨の玉子を此學校が養成する所であると思つて、此壓迫が加はつたのである。其に就いて小野梓先生がちやんと開校の時に斷つて居られる。それは

『最後に余は一の冀望を表し、之を本校の諸君に求め、天下の人士をして本校の公明正大なるを知らしめんと欲するものあり、是れ他なし、本校をして本校の本校たらしめんと欲する事是なり。今これを再言すれば、東京專門學校をして政黨以外に在つて獨立せしめんと欲する事是なり。余は本校の議員にして政黨員なり。今政黨員たるの位置よりして之を言へば、本校の學生をして咸く我が主義に遵はしめ、皆その麾下に屬せしめんと欲するは固より其の所なり。然れども余が議員たるの位置よりして之を言へば、暗々裏に我が學生を誘導して、之を我が黨に入る﹅が如き卑劣の擧動は實にこれを恥づ。惟ふに本校の目的たる、斯の學生をして速かに眞正の學力を得せしめ、早く之を實際に應用せしめんと欲するに在るのみ。故に我が學生にして眞正の學識を積むあらん乎、本校の望足れり。本校復た別に求むる所あらざるべし。而して我が學生にして異日卒業の後政黨に加入せんと欲せば、一に皆諸子が本校に得たる眞正の學識によりて自ら之を決すべし。本校は決して諸子の改進黨に入ると自由黨に入ると乃至帝政黨に入る

とを問うて、其親疎を別たざるなり。惟ふに是れ余一人の冀望なるに止まらず、恩人大隈公、校長、議員、幹事及び講師諸君も亦均しく冀望せらるゝ所ならむ。然るを世の通せざる者間々之を疑ふなり。蓋し亦た陋と謂ふべし。』

斯う明瞭に言つて居る、卽ち大隈侯始め創立者の心が公明正大な心であるとは、是を見ても明瞭であるが、疑心暗鬼といふか、卑しき心の人は他の心を矢張り忖度して卑しきものとする。それで其二十年の間に非常な壓迫を受けたのは事實である。

七　大學組織と理工科の設置

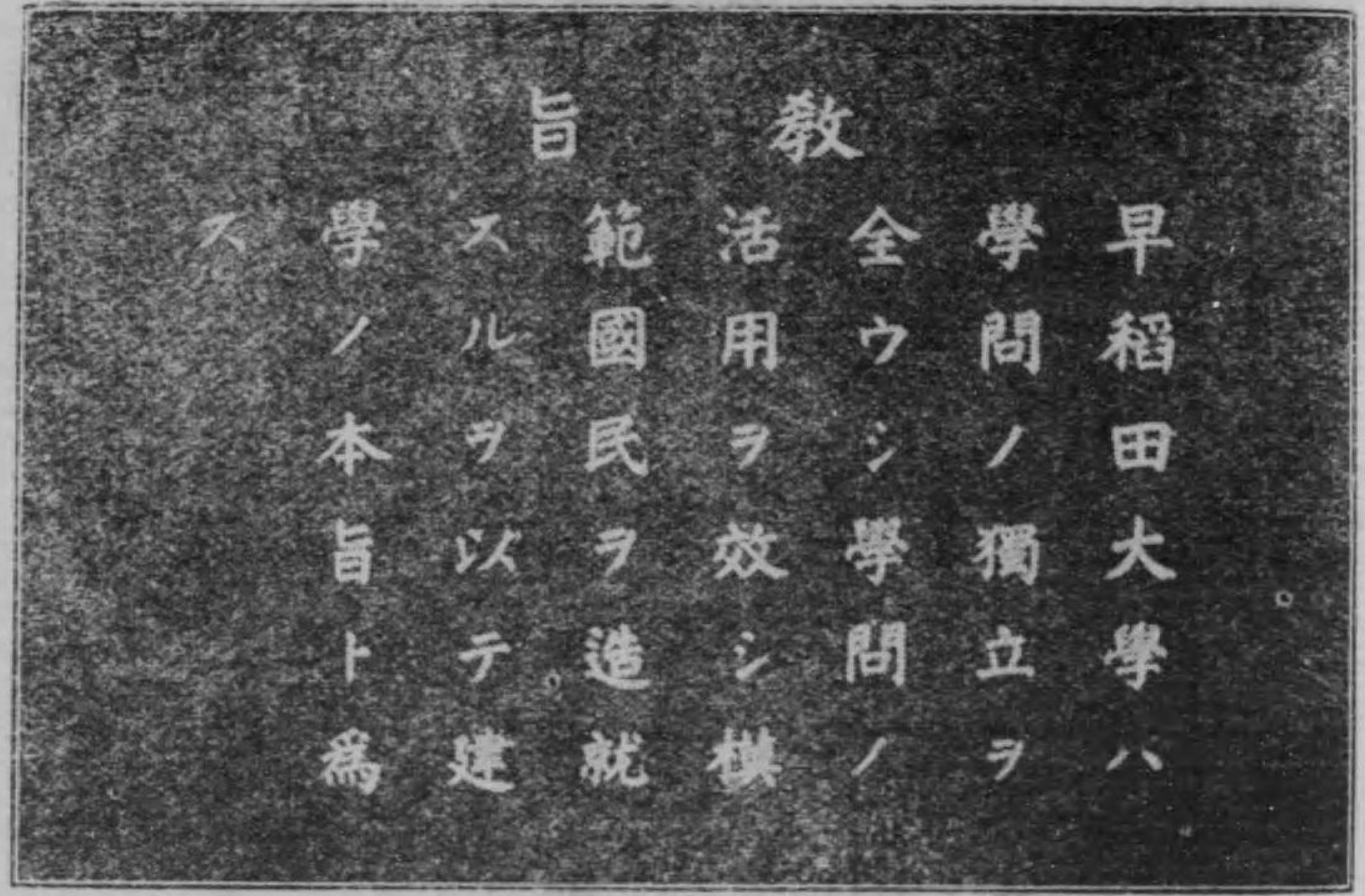
併しながらそれにも拘はらず、此學校は段々發達して二十年を經過したが、財政上の苦心なども色々あつたが、さういふ事は省いて、恰度明治三十一年頃、其頃迄は私は半ば學校を敎へて居たが、半ば政治に關係して居た。第一期以來衆議院議員となつて多少盡してゐたが、日淸戰爭以來、世中の形勢も段々變つて、政治の方は左程力を盡す可き機會がなくなつたのであるし、顧つて我學校を見ると、何時迄も同じやうな有樣で、生徒の數が多少殖ゑるばかりで、餘り向上し發達しない。どうも日本に於て私立大學のないといふことは文明的恥辱である、此學校を一つ私立大學にして見たいと自から揣らざる考を私が起した。そこで大隈侯にも申上げ同僚にも謀り、自ら進んで、校長は鳩山君であつたから、學監と云ふものになつて、東京專門學校を大學にする仕事を自ら引受けて、先づ明治三十五年東京專門學校を改めて早稻田大學と稱することを天下に宣言し、東京專門學校創立廿年早稻田大學開校の祝典を擧げ、爾來五年間諸方を奔走して、金がなければ出來ないから金を貰ひ集めた。恰度三十萬圓ばかり大方の篤志者が金を寄附せられた。是に於て始めて此私立大學、自から名乘つて私立大學と稱するものが出來上つた譯である。併しながら、其內容は政治、法律、文學、後に商科が加はつたのであるが、幸にして世間の望に適つた譯か俄に生徒が殖ゑ、千の學生が二千となり三千となり四千となり五千となり、終には其時分の中學實業の兩校を合せると一萬を以て數へ得ると云ふ位になつたのである。所で、所謂隴を得て蜀を望むは、是れ人情の然らしむる所である。綜合大學の如きものが出來上つたけれども、內容を見れば、皆大した設備の入るものではない、圖書館一つあれば、跡は扇一本で講釋して事の濟むものである。西洋あたりの大學には餘りさういふのは無い、帝國大學とても又そんなものではないから、是ではどうも幅が利かない、何としても之は實學を起し、設備の入るものを一つ置かなければ、我は私立大學なりといつて大きな顏も出來ない譯だと考へて、今迄五年の間諸方を煩して、非常に迷惑を掛けた人間が再び出掛けて金を集めると云ふも變なものであるし、頗る厚顏な次第であるが、併し惡い事をするのではないからと決心して、恰度明治四十年、卽ち五年經つ

て四十年の時に其志を發表した。四十年に創立二十五年祭を行つて、此の大隈侯の銅像も其時に出來たやうな譯で、其時に始めて第二期計畫を續けてやると云ふことを申出して、此理工科を造ることの經營に任じたのである。さうして四十一年二年三年四年五年、此間に凡そ百萬圓の金を世間の篤志なる方々から出して貰つた。其結果として早稲田大學理工科と云ふものが出來た。此理工科の出來たのはたゞ其學科だけ加はつたと云ふばかりではない、此學園に其學科が加はつたと云ふばかりではない、斯の如き費用を要する學科を私立大學が造り得たと云ふことの爲めに、而も他に率先して造り得たと云ふことの爲めに、此學校の基礎が確實になり、信用が大に增大したといふこと、是れは確かなる事實である。

八、創立三十年祝典と大學教旨

所で創立三十年の祝典をそこで以て擧げた。其時分には大分世界的にやつて、兎に角世界の凡そ三十ばかりの重なる大學から代表者を此處へ出して、向ふの運動場で殆ど二萬人ばかりの人が集まつて、前後に無い、盛んな祝典が擧げられた。こゝで先づ眞の意味の綜合大學が出來た。此時に早稲田大學の教育の趣旨と云ふものを尙一層完備することになつて、大隈總長の演說として其時に世間に發表された譯である。其はどういふ事かといふと、學問の獨立、是を第一の主義とする。次いでは學問の活用、是れが第二の主義、模範國民の造就、是れが第三の主義、此三つを以て早稲田大學の教旨と定むることになつた。卽ち是は創立三十年紀念の創業錄の中に載つて居る簡單なものだから、こゝに擧げて見ると、

早稲田大學教旨



早稲田高等學院所藏圖額

早稲田大學は學問の獨立を全うし、學問の活用を效し、模範國民を造就するを以て建學の本旨と爲す。

早稲田大學は學問の獨立を本旨と爲すを以て、之が自由討究を主とし、常に獨創の研鑽に力め、以て世界の學問に裨補せん事を期す。

早稲田大學は學問の活用を本旨と爲すを以て、學理を學理として研究すると

共に、之を實際に應用するの道を講じ、以て時勢の進運に資せん事を期す。早稻田大學は模範國民の造就を本旨と爲すを以て、立憲帝國の忠良なる臣民として個性を尊重し、身家を發達し、國家社會を利濟し、併せて廣く世界に活動す可き人格を養成せん事を期す。是を天下に發表することになつた譯である。世間大學多しと雖も、日本に大學多しと雖も、明瞭に此の如く其敎旨を定め、之を天下に發表した所のもの幾干ありや。是は諸君が他に向つて誇りとせらる可き適當な材料であると思ふ。學校と云ふものは設備の完全も必要であるが、それよりもより大切なるは、健全なる而も進歩的の敎旨を備へ、其敎旨に副はんが爲に努力するといふことである。是は諸君が誇りとすると共に、此主旨に副はんことを夙夜努められるやう、私は諸君に希望せざるを得ないのである。

九　學制改革と早稻田大學

そこで先づ綜合大學と云ふものは出來た。而して研究機關は恩賜の金を以て恩賜館を造り之に充てたが、私は其當時早稻田大學から派遣されて歐米を漫遊し、世界の大學を見て歸つて來ると、益々此研究機關の必要を悟つた。恰度其頃私は内閣に入つた爲めに、學長の職を退いたが、後繼者が色々努められ、恰かも御大典に際した所から、御大典記念事業として又第三期基金を募集し、圖書館を擴張し、是に添うて尙ほ閲覽室を弘め、研究室を擴大すると云ふことになつた。幸に其の資金も出來て居るから、今後は橫から見ても縱から見ても何人も指をさすことの出來ない立派な大學となるといふことを諸君は承知せられて宜しいのである。

其の中に世間は段々進歩をして來て、學制改革と云ふ問題が起つた。どうも政府者と云ふものは、兎角世間の進歩に後れるものである。現に此間まで私立公立では大學は出來ぬものと思つて居つた。又出來さぬ方針を取つて居た。大學ばかりではない、高等學校も出來ないものと思つて又出來さぬ方針を取つて居つた。ところが世中はなか〳〵そんな事では承知しない、そんな時勢ではないといふことで議論がやかましくなり、學制改革と云ふ聲が喧しくなつた。其時私は今は亡くなられた先輩の菊地大麓先生、卽ち菊地博士と提携して、敎育調査會の委員として學制改革の案を造り之が實行を計つた。其時の委員の大多數は皆我々の說に贊成をして吳れた。其中に私は大隈内閣に入閣することになつたが、其入閣した一の重大な意味は、其學制改革を實行する使命を果さなければならぬといふ事であつたが、在職僅かに一年、其事緖に着かざる中に大隈内閣は總辭職といふことになつて、寺内内閣是れに代つた。併し一旦進歩した時勢は却々容易に後戻りはしないもので、遂に曲りなりにも學制改革が出來上つた。不完全ではあるが出來上つて、豫て我々が數十年來唱へた官公私立平等と云ふことが、少くとも實行されることになつた。是は日本の敎

育の上に於て特筆大書すべき一大時期であると斯様に言はなければならぬ。事實に於ては早稻田大學なるものは綜合大學たる實を擧げて居るのに、政府者は之を認めない。社會は之を認めても政府は之を認めないが、到頭此法令の爲に政府者も又之を認めざるを得ないことになり、此に於て他の帝國大學の如き者と早稻田大學とは、事實は既に同じやうになつて居るのであるが、今や法文上に於ても、何等其間に差別なく、其間に懸隔なく、平等の地位に立つことになつたのは學問の進步の爲に、大學の發展の爲に、諸君と共に深く喜ばなければならぬ事である。斯くなつたのは何の爲めかと云ふに、是は苟くも斯うなつた譯ではない。是には色々な原因があつて、社會の進步と云ふこともあらう。官僚主義の衰頽といふともあらう。官僚主義の衰頽、社會の進步、色々の原因があらうが、最も有力なる原因は、論より證據といふ事である。都の西北早稻田の一隅に於て、横から見ても縱から見ても遜色のない私立大學が事實に於て出來た。又三田の高臺に於て、早稻田大學と相對して是亦遜色のない慶應大學が出來た。事實に於て、是が出來たと云ふ事が論より證據、輿論を動かし、頑迷なる當局を動かして、遂にこゝに此官公私立平等と云ふ事を實現した。是は決して過言でないと信ずる。是に就いては、早稻田なり慶應なり、其關係者數十年に渉つての勞を多としなければならぬ。私の如きも先輩の驥尾に付いて此事實を擧ぐる爲に多少の力を致す事が出來たのは衷心の欣榮とし、此上なき光榮と今尙ほ考へて居る次第である。

一〇　早稻田大學現在の地位と將來の使命

もう述べる事は略〻盡きたと思ふが、今日迄の早稻田大學は以上述べた所に依つて御考になつても分ると思ふが、兎に角三大時期がある。第一時期は此東京專門學校を早稻田大學としたといふ時期、是が即ち明治三十五年即ち創立二十年祝典の時に表はれた。次は理工科を建設するといふこと、是が大正二年即ち三十年祝典の時に完成した。次は今言ふ通り、表面上又法令上早稻田大學が到頭他の帝國大學と少しも其間に差別がないと認められたといふ時期で、即ち來年は創立四十年になるから、定めて當局者は其事を發表して大學自ら之を祝し、世間も又祝せられるだらうと思ふが、即ち是が早稻田大學の三大時期である。明治十五年の十月二十日といふ時から茲に四十年間經つて、始め八十人の學生を抱いて、文科の教室の半ばで始めたものが、今日の如き盛大なる學園になつたのは諸君と共に慶賀しなければならぬ。所で、早稻田大學は今日はどう云ふ地位に居るか、即ち今日の所では早稻田大學なる者は始めて地平線に立つたと言つて宜しい。過去四十年殊に創立當時は早稻田大學なるものは穴倉の中にあつた、穴居同樣の有樣であつた。是は確かな事實である。世の中では之を抑へ付ようく\とばかりして居つて、少しも之を助けるものがなかつた。全く穴倉の中に學校が出來たやうなものである。それが今日は漸く地の上に出た。

地平線上に立つことが出來た。斯う云ふ譯である。併しそれでよい譯ではない。人並になつただけで夫でよい譯ならば是程樂な事はない。人並になつたからといつて、それで安心すればそれ迄だ。後は唯退歩と墮落あるのみである。これから先が肝要である。これから先きは他の同等の有力なる大學、同等の地歩を占めて居る諸大學と競爭して一頭地を抽んずるといふことが早稲田大學の使命であるといふことは論を俟たぬ。此一頭地を抽んずると云ふことがなければ、過去四十年の努力、過去四十年の骨折は何の爲めだか分らぬ、斯う云ふことになる。卽ち諸君に努めて貰ひたい事は玆にある。早稲田大學の當局者、早稲田大學の教授諸君、總て此大學の關係者に私から求める所のものは、私から望む所のものは此點にある。競爭して勝つ、唯他と對等になつたばかりではいけぬ。自分には斯う云ふ不足があるから、斯う云ふ不利益があるからと、愚痴を溢す時代を經過した。過去にはそれでも宜しかつたが、今日は認められて同等の權力を備へ、同等の地歩を占めたから、今更愚痴を言ふ種はない、此上他と競爭して負けるならばそれは諸君の骨折が足らないのだと斯う言はなければならぬ。斯ういふ時期に今日はなつて居るのである。どうかして他に比して一頭地を抽んずるといふことをしなければならぬ。一頭地を抽んじたと人が認める樣にならねばならぬ。是は當局者の骨折からも生れて來る、教授講師諸君の御盡力からも生れて來るが、第一には卒業生諸君、卽ち學生諸君が此大學を卒業して後の成績、其卒業して後の結果が良いか惡いかと云ふことによつて判然すると思ふ。だから結局責任は諸君に負つて貰はなければならぬ。諸君に高く飛んで貰はなければならぬ、高く飛躍して貰はなければならぬ。諸君が高く飛躍すればする程學校の地歩を進められる。其結果早稲田大學が他に比して一頭地を抽んずる譯になる。併し諸君が高く飛ばんとするならば高く飛ぶ準備としては深く學ぶといふことが必要である。卽ち此學園に學ばれる間深く學ぶといふ事是が最も必要なことである。併しながら深く學ぶといふことは詰込さへすればそれで結果が宜しいといふものではない、學ぶ所のものが不消化ではいけない、消化しなければいけない、消化しなければ決して高く飛ぶ譯にはいかない。學而不レ思則罔といふことを知らねばならぬ。此學んだ所のものを消化させようといふならば自修的勉強、自主的研究と云ふことを忘れてはならぬ。自ら修める、自ら主として勉強をする、教師から受身になつて教を受けると云ふ腑甲斐ない根性を一掃して、自ら主となつて學ぶといふ自修といふ二字さへ忘れなければ學んだ所のものは必ず消化する。學んだ所のものが消化すれば、必ず將來高く飛ぶことが出來る。是は決して間違ひはない。私の長い經驗の上から牡丹餅大の印を捺して諸君に保證することが出來る。どうぞ此點を忘れないやうに、此點を忘れず、早稲田大學を愛せられるならば、今より深く學ばれ、他日高く飛ぶ準備をして、後大いに社會に名聲を博せられるやうにしたいと思ふ。けれども學問が出來たといつて、それで世中に出て高く飛べるものではない。根本は

體力だ、體が弱ければ到底駄目だ。體が弱ければ、到底社會へ出て雄飛することは出來ない。私は此大學の命を受けて海外に遊び、歐米諸大學を視察して歸つて來た後に、シミゞゝと感じて迚も及ばないと思つたのは此體力の一事である。他の設備の如きも歐米は實に立派である。然しそれは金さへあればどんなにでも立派になれるが、體力と云ふ段になると西洋諸國の學生と日本の學生とは著しい相違がある。此體力の相違が、やがては詰り歐米と日本と較べて、或は日本が及ばぬ事になりはしないかと、我々を懸念せしめる大原因であるから、どうしても勉强しなければならぬ、學問に努めなければならぬが、同時に此體力を養ふといふことは、諸君が夢寐の間も忘れてはならぬ事であると思ふ。

一一　「新しい」といふ意味

以上述べることは盡きたが、最後にもう一度繰返していふ。始め言つた通り、今日は改造の時代である、今迄問題にならなかつた勞働問題とか、普通選擧とか、色々な新しい問題が起り、總て改造するといふ世の中になつた。隨つて新しいといふ氣分が世の中に漲つて居る。諸君の頭にも漲つて居る。決して是は惡い事ではない、誠に結構な事である。けれども始め述べた如く、新しいと云ふ事は、古きを積んで始めて本當の新しさを出す譯である。千年前の事でも昨日の事でも古いといへば皆古いが、千年前から昨日迄過ぎ來つた事を知つて、其上に或る者が加はつて始めて眞の進步と云ふ者がそこに出來るのである。さうでない新しさは、一向根據のない新しさで何の役にも立たぬものであると私は切に思ふ。學校といふ所はどう云ふ所であるかといふと詰り古い事を學ぶ所である。學問といふことは古い事を知ることである。古い事を學ぶのが學問、古い事を敎へる場所が學校、其處で學んだ者に、諸君の頭で新しさを加へて、始めて着實な、穩健な進步と云ふ者が出來るのであるから、新しさを今の青年諸君が望まれるのは進步の種で此上なき喜びとする所であるが、どうか輕薄なる新しさを以て滿足されざらんことを希望する。古きを溫ねて新しきを加へられんことを希望する。子供の畫くやうな繪を畫かずに雪村の畫いた瓜の如き繪を畫くやうになつて貰ひたいと切望するといふ事を、終りに臨んで今一度諸君に勸告して此噺を終る次第である。（大正九年四月二十八日早稻大學中央校庭に於て）

早稲田大學敎旨

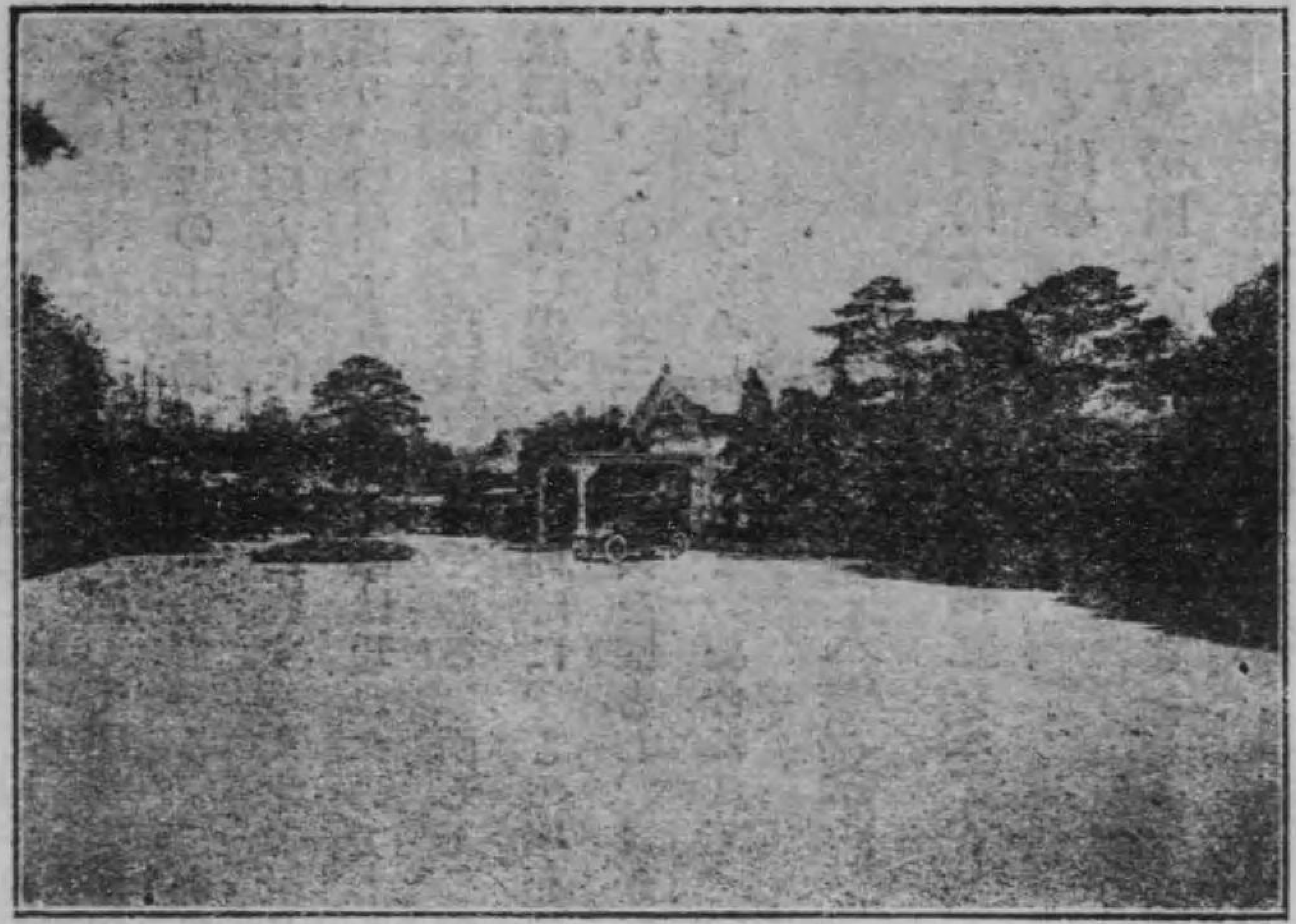
前早稲田大學總長 侯爵　故大隈重信

閣下、諸君、今日は早稲田大學の三十年の祝典を擧るに當り、見渡す限り、此大なる式場に殆んど溢れる如く參列されたのを感謝するのである。殊に吾人の最も光榮と致すのは、歐米諸國先進なる文明諸國の百餘の大學から祝辭を送られたのを衷心より感謝するのである。殊に著名な歐米の名譽ある大學から參列者を送られたことを早稲田大學の名譽として深く感謝致すのである。私は玆に强大なる列國の全權大使全權公使諸閣下にも御案內致して置いて、其の多數は御出席の御承諾を得た、是亦學校として深く感謝致す所である。抑〻敎育は、其意味に於て世界的であるのである。世界の文明は何に因つて導かれたかと申すと、全く世界の學術の結果である。世界の文明は學術が根本である。而して學術の根本は大學に在る。眞理には國境なし。眞理は大學を透して世界の上に働いて居るのである。この早稲田大學は、創立以後僅かに三十年であるが、吾人は此大學より時代の要求に應ずる人才の數多輩出することを希望して居つたのである。御承知の通り、明治十五年に此大學は現れたのである。專門學校として現れたのである。其時に學問の獨立を標榜して現はれたのである。而してこの三十年間に日本の文運、政治上、法律上、社會上の狀態は非常に進步したと同時に、この學苑の敎旨そのものも次第に擴充されたのである。こゝに於て、この創立三十年祝典を機とし、吾が早稲田大學の敎育の趣旨、則ち敎旨を宣言するの必要を感じたのである。則ちこの場合に於て、數ケ條の宣言を朗讀する。

早稲田大學敎旨

早稲田大學は學問の獨立を全うし、學問の活用を效し、模範國民を造就するを以て建學の本旨と爲す。

早稲田大學は學問の獨立を本旨と爲すを以て、之が自由討究を主とし、常に獨創の硏鑽に力め、以て世界の學問に裨補せん事を期す。



大隈侯爵邸玄關

早稲田大學は學問の活用を本旨と爲すを以て、學理を學理として研究すると共に、之を實際に應用するの道を講じ、以て時世の進運に資せん事を期す。

早稲田大學は模範國民の造就を本旨と爲すを以て、立憲帝國の忠良なる臣民として個性を尊重し、身家を發達し、國家社會を利濟し、併せて廣く世界に活動す可き人格を養成せん事を期す。

是が本大學の敎育の大綱である。

之を少しく說明する必要を感ずるのである。世界の文明は停滯するものでない、世界の文明は日に進步しつゝある。總て世界の思想感情、總て社會の狀態は日に月に變化しつゝある時に當つて國を立て社會を爲し、又この國と社會との爲に大學敎育を施さんとするには、其根本として雄大なる理想がなくてはならぬ。今、日本は將に東西文明の接觸點に立つて居る。吾人の大なる理想は文明の調和者として東洋の文明と西洋高度の文明と並行せしめ、調和せしむるにある。吾人は此理想の實現に努めなくてはならぬ。此理想を實現するには、何としても、學問の獨立、學問の活用を主とし、獨創の研鑽に力め、其結果を實際に應用するにある。而して之に任ずべきものは個性を尊重し、身家を發達し、國家社會を利濟し、廣く世界に活動する事を以て自ら任じ、又其任に堪ふる所の人格にある。是れ卽ち模範國民である。全體大學に學ぶ者は多數ではない。多數國民の少數である。此少數の高等敎育を受けたるものが、國民の模範となる。國民の中堅はこゝに存する。國民の勢力は玆に基するのである。それが國家を堅實に發達せしめ、總て文明的事業の急先鋒となるのである。而して模範的國民とならんとすれば、知識のみではいかぬ道德的人格を備へなければならぬ。而して一身一家一國の爲のみならず、進んで世界に貢獻する抱負が無ければならぬ。之を支那古代の語を以て說明すれば、修身、齊家、治國、平天下である治國平天下、世界の平和を計らんとすれば、先づ國を治めなければならぬ。立國の意味は現在の思想から云へば二つに別れる。一は國、一は社會、社會が堅實に發達しなければ國も治らない。而して其根本は家である。一國の本は一家である。家庭は則ち國を成す根本である。道義の根

本も亦此家に發する。善良の風俗も此家庭から生ずる。故に敎育は、人格の養成を根義とする。唯だ專門知識を吸收するのみに汲々として、此點を閑却するに於ては、人間は利己的となる、進んで國と世界との爲に盡すといふ犧牲的精神は段々衰へて來るのである。恐るべきことである。是れ文明の弊である。此弊を避けて、其の利を收むるのは模範國民たるものの責任である。是れが早稲田大學の敎旨の最も根本を爲すべき要點である。模範國民の、國家に對し、社會に對し、自己に對する觀念の根本を爲すべきものはこゝにある。この理想を實現する爲めには、吾人は終身努力しなければならぬ。又只今學長から報告された如く、此の大學の今日の盛なる所以の本は全く帝室にある、皇恩にある。明治大帝の御沙汰書、且つ金幣を賜はり、今上陛下は東宮にゐられた當時、此の學校の敎授及び實驗を親しく御覽になつたと云ふ有難き學事奬勵の思召が此大學を盛ならしめた本源である。是に於て私は斷言する。吾人は將に國家開闢以來の皇恩に對し、努力して報恩の誠を致さねばならぬ。此皇恩に報ずるの道は吾人の理想を實現するにある。吾人の理想とは如何、東西の文明其物を調和し、遂に世界の平和を來すと云ふのが、吾人最後最大の理想である。此の理想を實現することに力を盡すが、國家開闢以來三千年の皇恩に報ずる所以なりと私は信ずるのである。吾人がこの大學の爲めに力を盡せば、此の大學は愈々盛になる。此の大學が盛になると同時に、國家も愈々盛になる。國家の目的とこの早稲田大學の目的は必ず一致するのである。而して敎育の事は何等國際上に杆格を生ずることなく、世界に大なる貢獻を爲すことが出來る。學術は世界共通のものである。眞理に國境なし、眞理は共通である。是れ世界百有餘の大學から或は代表者を參列せしめ、又祝辭を送られた所以なりと私は信ずるのである。私は衷心喜びに堪へぬ。滿場の諸君が世界的の事業に力を盡さるゝことを實に感謝致すのである。然しながら、此の大學はまだ總ての點に於て甚だ不十分である。世界文明の進んで止まない如く、大學の擴張發展も進んで止まないものである。この大學の將來愈々盛になることを望む。是に於て常に社會の爲に力を盡さるゝ有力なる諸君は、今後益々この大學の爲に助力さるゝことを信じて疑はぬである。今日は天候の惡いに拘らず、斯くの如き盛會を開くを得たのは衷心喜びに堪へぬ次第である。多數御參列の諸君に、私は衷心感謝の意を表するのである。（大正二年十月十七日、早稲田大學創立三十年祝典當日の演説）

內容充實の時代

早稲田大學名譽學長 法學博士　高田早苗

只今から學長就任の式を擧げる譯であるが、此の場合には、申すまでもなく、大隈總長自らここに臨まれて、親しく式辭を述べられる可きはずであるけれども、諸君の御承知の如くに、先頃來病氣に罹られて、幸に唯今は快方に向はれて居るのであるけれども、まだ諸君の前に立つて式辭を述べるだけの場合に立至つて居られない。故に私が總長を代理して、此の場合に式辭を述べる役目を務めようと、かやうに考へる。

御承知の如くに、今日まで三年の久しきに亙て、平沼博士が諸君の上に立つて、學長の職に當られて居つたのである。學長は滿三年を以て任期が了るのであつて、去月卽ち十月が滿期になつた譯である。學長を定めるのは、校規に依り、維持員會に於て之を選擧するのである。維持員は、平沼學長が長らく其の職に當られた其の勞を多とすると同時に、尙引續いて其の職に居られんことを希望して居つたのである。けれども早稲田大學多難の時期に當つて三箇年間其職にあられ、尙其の以前一箇年間は代表理事と云ふ名稱を以て學長の職を執つて居られて、四年間、而かも滿四年間要職に當つて繁忙を極められて、非常に疲勞をされた。其理由よりして、維持員から引續いて職に居られんことを希望されたにも拘らず、少くとも一旦は閑散の地位に就かしてもらひたいといふたつての御希望であつた。さう云ふ次第であるから、止むを得ず、他に後任の者を求めなければならぬ。玆に於て維持員は、早稲田大學敎職員若しくは學生諸君の輿論の在る所を考へて、敎授中の最古參であり、學識深く、德望の高い鹽澤博士を滿場一致を以て選擧するといふことになつたのである。鹽澤博士は、自分は學校の經營といふが如き、事務を監督するといふやうなことは長所でないから、是非とも御免を蒙りたいといふたつての辭退であつたけれども、最も先輩の一人でもあられ、最も資格の備はつて居られる人であるから、さういふことでなく、是非とも假令一時であつても、維持員の折角の希望を空しくしないやうにしてもらひたいといふことになつて、同博士は遂に其の希望を容れ、平沼君に次いで學長になることを承諾せられた。其の結果として今日

の就任式を擧げると云ふ次第になつたのである。新學長が如何なる人であるかと云ふとは、私が多辯を費さなくても、諸君はよく御承知のとである。而して特に諸君の喜ばれるのは、新學長は早稻田大學其者が生んだ人であるといふ點にあらうと、私は竊かに考へる。今まで學長たりしものは、第一が斯く申す私である。第二に學長たりし人は天野博士である。第三に學長たりし人は平沼博士である。いづれも無論此の學校に緣故も深く、此の學校の創立當時より關係をして居つたものであるのであるけれども、學校其の者が生んだ人ではない。私一個としても、創立當時より此の學校の事に關係して、聊か微力を盡したと云ふ點から考へて、其の學校が生んだものが學長の重職に當るやうになつたといふことは竊かに喜ぶ所であり、學生諸君も、蓋し是れには同感であらうと思ふのである。

學長は第一に私が務めたのである。東京專門學校時代には校長といつて、學長とはいはなかつたのである。早稻田大學になつても、一兩年間は尙校長と云ふ名義を存して居つて、物故せられた鳩山博士が校長の職に居られたのである。私が此の學校を統率するとになつた時から、學長と云ふ名義に改まつた。故に私が第一の學長である。尤も其の以前から此の學校の經營其の他萬般の事に當つて居つたが、表面名前を出したのは、學監として五ヶ年、學長と云ふ名義を以て八ヶ年と思ふ。續いて天野博士が二ヶ年、續いて平沼博士が三ヶ年、事實を言ふと四ヶ年である。而して今度鹽澤博士が其次に學長となられたといふ順序である。

早稻田大學は私が局に當つた間は所謂創業時代であつたのである。創業時代は可成り骨が折れたには相違ないけれども、創業と云ふことは人に認められ易いものである。創業時代に於て爲したる事は、何人にも目に着くのである。度々話の出る如く、學校創立當時には、校舍は彼處の文科の敎室半分であつた。學生は僅に八十人。是れは最初の時期に屬する事であるが、明治三十六年と云ふ年私が始めて經營の衝に當つた時、卽ち早稻田大學と名を改めた時でも、學生は千人有るか無しと云ふ位であつた。敎室は直ぐ其處に見える文科の敎室の全部と、彼處の煉瓦の建物とより以外には何物もなかつたのである。それが、十三年間に、とにかく一萬の學生を包容し、見らるゝ如き此の大伽藍が出來上つたと云ふ譯であるから、何人の目にも、大なる進步發達と云ふとは直に映ずる譯である。如何に學問氣のない人でも、如何なる門外漢でも、早稻田大學は大きくなつたといふことは必ず言得るのであり、又そこに氣が付くのである。しかし是からは仲々さうはまゐらぬ。創業時代に續いて來る者は一口に守成の時代と云ふけれども、忌むべきは此の守成と云ふ二つの文字である。創業に依つて相當に地步を造つたのを唯だ守成して居るのみでは、何の役にも立たぬ。唯だ守成して居るのみでは結局は退步となる。創業の上に多々益々或るものを加へて始めて意義ある繼續があるのであるから、早稻田大學の將來は守成であつてはならぬので

倫敦博覽會に出品したる本大學沿革一覽

ある。それならば何でなくてはならぬかといふと、これに充當まるのは、內容充實といふ言葉が最も適當であると私は思ふ。創業時代は擴張時代である。今日及び今日以後は內容充實時代であると、斯ういふのが蓋し適當であらうと思ふ。內容充實と云ふ事業は仲々困難である。困難な事業であると同時に、人の目に着かない骨折がなければならぬのである。私が此の學校を預かつて居つた當時、寧ろ其の以前即ち明治十五年に創立されてから三十五年に至る迄は、當時東京專門學校と稱した早稻田大學は地平線上に頭を出さうとするとが出來なかつたのである。世の中は總て敵であると申しても宜い位なものであつた。三十五年に早稻田大學と云ふことになつた時から即ち穴倉の底から地平線上に出なければならぬといふ Struggle、出でなければならぬといふ奮鬪が始まつたのである。而して其の以後十年間を費し、遂に理工科の設備までが全く成つたといふ時に至つて、此に於て始めて地平線上に頭が出たのである。人並の學校になつたのである。其の後に於て政府も遂に耳を輿論に傾けなければならぬことになつた。既に社會が大學と認めたものを、大學と認めることを爲さなかつた偏狹なる政府も遂に輿論に耳を傾けなければならぬといふことになつて、今日では帝國大學其他の大學と比べて、何れの點に於ても、總ての權利、總ての特權が、何等讓る所がない、斯う云ふことになつて來た。是れで一段落ついた。我々の多年の志望が此に於て全うせられた。目的は聊か成就したと申して宜しいのである。しかしそれで總て宜しいと云ふ譯のものではない、却つて是から以後の努力が多大でなければならぬ。唯帝國大學と同じものになつた、同じ大學であるといつてそれで以て滿足し、それで以て骨折を止める、努力を少くするといふ事であれば、今日大學と云ふ名があつても、其の中の最も劣等なる地位に立たなければならぬといふとになる。さうすれば過去の努力過去の骨折は皆空しくなると云ふ譯であるから、此上は等しく大學であるが、其の大學の中で最優等の地位を占めなければならぬ。慶應義塾何かあらん、帝國大學何かあらんと云ふ氣慨を以て大いに奮鬪努力を續けて、最優等の地位を占めるといふこと、是が將來の學長の骨折、又教授諸君の御骨折、而して同時に學生諸君の骨折でなければな

らぬと斯う思ふのである。

是れは仲々容易な事ではない。兎に角地平線上に出て人並になると、兎角なまけ勝ちになる怠り勝ちになるものであるが、若しさうなつたらば、萬事窮するのである、さうならずに學長、教授諸君、學生諸君、相共に努力して最上の地位を占めるといふ覺悟がなければならぬ。他の學校と軋轢してはならぬと同時に大いに競爭しなければならぬ。競爭して勝たなければならぬといふことが、未來の早稻田大學の標榜でなければならぬ。此の抱負ある、此の氣慨あるものを率ゐて立つのが學長の責任であるから、仲々將來の學長は骨が折れて、仕事が目に立たなくて、而して責任は重大であると、斯樣申さなければならぬ。

早稻田大學に於て將來爲す可き事は多々あらう、内容充實と申しても、有形的の事もあれば又無形的の事もある。有形的でも仲々此の儘ではいかぬ。此のバラックの如きものではとても滿足は出來ない。聞くならく、亞米利加の大學總長卽ち早稻田大學で謂ふ學長は Found it brick and Left it marble といふことを其の誇とし、又事業とするといふことである。就任の當時に於ては煉瓦であつたが、それが職を去る時には大理石の建物ばかりとなつたといふことが學長の誇りであり、譽であるといふことを聞いて居る。然るに此の貧弱なる、五大國の一になつたといつても、少くとも財力に於ては甚だ貧弱なる日本に於ては、一時に之をマーブルにするといふ事は覺束ないか知れないが、Found it wood and left it brick ぐらゐにはしなければならないと思ふけれども、是は比較的容易いことである。金さへ集まれば出來ることであるが、寧ろ重きは無形的の内容充實にあると思ふ。無形的の内容充實といへば早稻田大學の敎旨、敎育趣旨を現實にするといふことであらうと考へる。學問の獨立、學問の活用、模範國民の造就、是れは言ふまでもなく、早稻田大學三十年の祝典の際に定められたる大切なる敎育である。此の敎育を現實にするといふことが無形的の内容充實であるが、是れは又目に立たぬと同時に頗る骨の折れるとである。順序を言へば模範國民の造就が第一であらう。此の大學に學ぶ諸君は必ずしも悉く學究になる譯ではないが、一人殘らず模範國民にはならなければならぬから、是れが先づ第一であらう。續いては折角學んだ學問の應用を努める、應用といふと卑近な言葉の樣であるが、決して卑近どころではない、學問を學問として學んで、それでお終ひになるならば、學問をした甲斐はないのである。之を實際に應用することによつて愈々深味が加はる。愈々效果が現はれるといふ譯である。さうなれば自然日本の學問は外國と比べて見て獨立が保てるのであるから、順序から言へば第三が一となつて、第一が最後の目的になる譯だらうと思ふ。とにかく此の目的の貫徹を大いに努めなければならぬ。之を努めると申して、學長一人の力で、どれだけ出來るものではない。敎授諸君の努力を俟たなければならぬ事は無論であるけれども、敎授諸君が如何に骨を折られたからとて、

それだけ目的を達し得られるものではない。要するに學生の覺悟如何によるのである。早稻田大學の學風は自主的教育にある、自修的教育にある。自から修め、自から主として研究し、教授諸君を顧問として意見を聽き、指導を俟つ、それが學風であるとすれば、大目的たる無形的の內容充實が出來るか出來ないかは、此所に集まられたる諸君の奮發如何に依る、覺悟如何に依ると、私は斯樣に考へる。

今日は式を擧げる場合であるから、長い事を御話をする必要はない。以上述べた所によつて、此學校の過去と前途の抱負とは自から明かな譯であらうと思ふ。新しく就任せられたる學長に對しては、言ふまでもなく十分心得て居られるが、此の抱負の實現に御努力を請はなければならぬ、斯樣に私は考へる。

終に臨んで、諸君と共に、前學長平沼博士の多年の御骨折御盡力に對して感謝の意を表し、次に新學長鹽澤博士の健康を祝し、將來の努力を希ひ、最後に、大隈總長の一日も早く囘復せられて、親しく諸君に向つて、例の高談雄辯、四隣を驚かす御話を伺ふやうな時機の早からんことを希ひ、以て式辭を終ることにする。（大正十年十月三日、早稻田大學校庭に於ける鹽澤新學長就任式當日の式辭）

大學の起原と使命

早稻田大學々長
法學博士　鹽澤昌貞

御參列各位並に學生諸君、私は本日就任の辭を述べるに當つて、先づ其事情に就いて一言して置きたいのである。先程高田名譽學長より、是に就いて御話があつた通り、私の淺學不才は勿論の事であるが、經營の才に至つては殊に乏しいといふことを自覺してゐるので、先般來維持員其他先輩諸君より學長の職に就く事について御話を受けた際にも、私の如き者は寧ろ學窓にあつて教授に專ら當ることが適當と考へるのであるから、其方は寧ろ御辭退申したいといふことを切に申上げて置いた次第である。併しながら兎に角一同も皆後援をするし、早稻田大學の如き大なる機關

の運轉は獨りで出來るものではない、各方面から助けるから、兎に角職に就くやうにと切に御勸めを受けて、さう云ふ譯であるなら、暫くなりとも御受けをしようと、斯う云ふ次第で維持員會の御推擧に應じて御受けをしたのである。

此の如き次第であつて、最初は私は寧ろ此際、是迄就いて居つた事務上の職も御免を蒙つて、專ら學業の方に當りたいと思つて居つたのである。私も過去六年間理事の一員として聊か事務の一部に關係致して居つたが、今度から少し樂と云ふ譯ではないが、私は自ら稍適當と思ふ方に力を盡さうかと考へて居つた所、今申上げたやうな次第で、却つて總ての責任を此際私が負うやうに成つたことは、私として實に其負擔の大なるを思ひ、殆んど所謂瘦馬に重荷の感を以て夙夜戰々競々たらざるを得ざる次第である。併しながら一度御受けをした以上は、駑鈍に鞭つて誠心誠意一身を犧牲にするも、任にある間は萬難を冒して其重責を全うするとに力を盡したいと考へるのである。どれだけの事が出來るか分らぬけれども兎に角私の總ての力を傾注し、諸君の御力を藉りて、早稲田大學の完成の爲めに聊か盡す所ありたいと切に冀ひつゝある次第である。私は先刻來御話のあつた通り、此學校で生れた者であつて、早稲田大學は即ち私の家であるのである。

顧みれば、私が早稲田大學の息子の一人となつたのは今から三十三年に當る。早稲田を出てから丁度三十年になつて居る。三十三年から三十年前迄諸君と同じ資格に於て、此學校で高田名譽學長を始め其他先輩諸君の教を受けて居つた。當時に於ては講堂は即ち名譽學長の御話になつた通り、其直ぐ前に聳えて居る校舍――と言ふと大層大きく聞えるが、それで學んだ。私の入學當時に於ては所謂 Brick Building 煉瓦の講堂もなかつたが、卒業間近に是が出來上つたといふ樣な次第である。學生の數は恐らく今日に於ける最大 Class の一つ程もなかつたのである。卒業式の時には各科皆一所に寫眞を撮るといふ樣な次第で、私の卒業した時の寫眞も今尙ほ殘つて居るが、それを見ると極めて少數であつた。さう云ふ時代から私は此早稲田にゐたのである。我大學の發展に就ては我々の尊敬する大隈總長の賢明なる御指導は勿論の事であるが、實際其衝に當られた高田名譽學長を始めとして先輩諸君の力に依ることは申す迄もない、四十年間の非常なる奮闘に依つて、此早稲田大學は微々たる專門學校より發達して、今日は世界に認められたと申しても或る意味に於ては正當であらうと思ふ。是は全く先輩諸君の獻身的犧牲的の努力の結果であるといふことは、私がよく承知して居るのである。

早稲田大學の今日の發展は決して偶然ではない。大學教育といふものは製造し得るものではないといふことは諸君も御承知のことである。此大學は即ち製造したものにあらずして生長し來つたものである。Grow し來つたものである。其微々たるものより之を守り立つて今日の盛況を來す迄には幾多の困難があつたといふことを私はよく承知致して居るのである。有形上の困難は

勿論のこと、無形上の困難が大であつたと云ふことも承知致してゐるのである。諸君も御承知であらうが、明治十五年に早稲田大學即ち當時の東京専門學校が創立された時には何を以て其Mottoとされたか、標語とされたかと申すに、即ち學問の獨立と云ふ事であつたのである。今日尚ほ然りである。明治十五年に創立者たる大隈總長又總長を助けて其實際の衝に當られた先輩諸君が、此學問の獨立といふ事について、どれだけの深い意味をもつて考へられ、工風されたかといふ事については、私は今こゝに一々詳しくは述べないが、諸君は早稲田大學の歴史をよく御研究なさると、そこに十分の深い意味が含まれて居るといふことを御諒解になるだらうと信ずるのである。

早稲田大學の歴史に就いては、二十五年紀念式の時、或は三十年記念式の時に、記念錄が出された。それ等を繙けば大體の事情は分るのであるが、今日の學生諸君も現在の發展が何に基いて居るかといふことを知るについては、過去の早稲田の歴史に御精通あらんことを希望するのである。昔から羅馬は一朝にしてなつたものでないといふが、早稲田大學も決して一朝にして成つたものではない。勿論時勢の進歩、時勢の刺戟と云ふものが大學の發展に關係のあることは言ふ迄もない。唯外部の力で自然に生長したと考へると、是れ大なる誤りがある。内に或る力、或る精神があつてそれが段々と向上し、發展し、次第に時勢を動かす樣な力となつた事は、先刻名譽學長より御話のあつた大學待遇の平等の如きは其一端であると言つて宜からうと思ふのである。又我邦に於ける社會上、政治上、文化上に於ける進歩に對して、此早稲田大學がどれだけ貢獻してゐるかといふことも公平に研究すれば、歴々として數ふべきことが多いのである。さういふ關係を過去に於て持つて居たのである。

それで今後此早稲田大學の本領を全うするについては、言ふ迄もなく、早稲田大學の研學の趣旨を益々發揮するより外はないのである。研學の趣旨は申す迄もなく、學問の獨立即ち研究の自由、學問の活用及び模範國民の造就と云ふことにあるのである。是だけ申せば唯簡單のことのやうであるが、其意味は極めて深長である。其一つの趣旨を敷衍しても一月や一ヶ年の講釋は十分出來るのである。是迄に於ても、此研學の趣旨に依つて早稲田大學は進行し來つた者であるが、今後に於ても益々此趣旨を發揮して益々之を擴充するといふことに努めるのが我々の義務であると考へるのである。元來大學の本領は如何なるものであるか、私は此所に教場式の講釋はしないが、詰り一方に於て研究である、Investigation である。同時に又教授である、Instructionである。研究し之を教へると云ふことは大學の主たる職分である。此事は今一々申上げる必要はない。早稲田大學も學問の研究、自主的研究といふ事については相當に力を致し、多少其方に向ひつゝあるけれども、我々から見れば尚ほ以て滿足の狀態に達して居るとは考へないのである。是れから尚一層其方面に向つて盡す必要があると思ふ。又教授の方法等についても、是又前々代の學長以來色々

本大學野球選手が米國各地大學に轉戰して寄贈されたカップ

是について御教訓もあつた。自修的研究、學問の消化と云ふとについては盡力しつゝあるけれども、是もまだ十分とは、言ひ難いと思ふのである。理想的に考へれば、あらゆる方面に於て尙ほ十分にしたいといふが少くないのである。之を十分に實現するといふ事が早稲田大學の責任である、義務である。獨り無形の方面に於て爲すべき事があるばかりでなしに、有形上の方面に於ても、補ふべき必要が幾多存在してゐるのである。學生諸君も今日色々の不便を感ぜられることもあらう。我々の方に於ても色々な方面に於て設備の上に尙ほ甚だ不十分であるといふことを感じて數年來種々計畫もしつゝあるのである。是れから益々それ等

の充實に力を盡さなければならぬと思ふ。一例をいへば、研究機關の設備も亦不十分であるから成る可く早く研究圖書館を建設しなければならぬ。是はもう數年來の宿案である、又是に對する準備もして居るのであるから、遠からず出來ることになつて居る。一日も早く此研究圖書館を完成して是に依つて研究上の進歩に貢獻したいと思ふ。其他色々設備上のことについて慾をいへば幾らもあるのである。教授諸君に對する設備、又學生諸君に對する設備、又大隈總長が豫て申されて居る所の大講堂の建設、是等の事も數へ上ぐれば澤山あるが、併し是は唯無形的の努力のみでは之を實現する事はむつかしい。物質的の要件が入るのであつて仲々さう急にといふことは出來ぬが、其方に向つて機會があれば力を盡すやうにしたいといふことは、當局者一同の考へて居る所である。

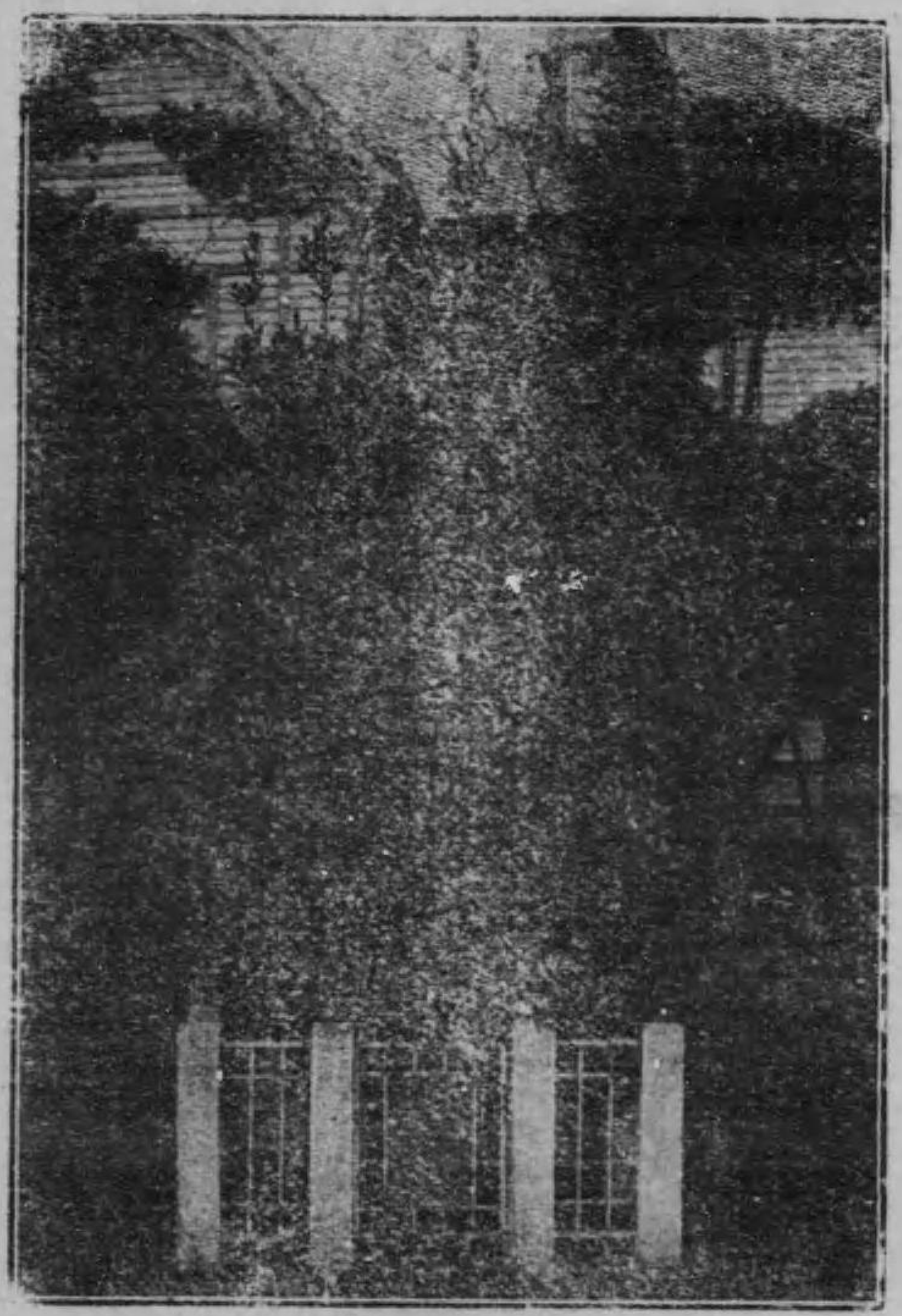
大學といふものは詰り一方に於ては研究と云ふことを十分に進めなければならぬのであつて、是についても種々な方法又機關も必要だらうと思ふが、一方に於て教授諸君及び學生諸君の研究を促し、又其研究の結果によりて一般の文化に貢獻すると云ふやうな Organ も必要であらうと思ふ。是等の事も今後着々講究して見たいと思ふのである。詰り研究發表の機關といふものも多年考へて居る所であるが、成る可く早く成立するやうに工風して見たいと考へて居る。

一體大學といふと、何よりも研究といふことが主であつて、此大學と云ふ者の起原はどういふも

のであるか、今此所で講釋をして諸君を長く煩すのではないが、我國にも昔から大學があつた。王朝時代にはおもに支那の制度に據つた大學があつた。是は純然たる政府の學問所とも言ふ可きであつたらう。今日發達した大學は多く歐羅巴に範を取つて居る。歐羅巴では御承知の通り大學の一番早いのは伊太利の大學で、ボロニヤ大學、それから相次いて巴里の大學である。伊太利の大學は十二世紀頃に稍定まつた形式を具へた。巴里の大學は十三世紀であるが、それから相次いれオックスフォールド大學が十四世紀頃に整頓して來た。尤も沿革からいふと、其起源はもつと古いのであるけれども、大學の形をしたのは今申す通りである。それから次いで獨逸に大學が出來るそれから十八世紀の初には亞米利加のハーバート大學—當時はハーバート・カレージと申して居つたが—が出來る、それから續いて諸方に澤山大學が出來る様になつた。で、此大學、University といふものは始めはどういふ意味であつたかと云ふと、後には Study of Universe 宇宙の研究、卽ち總ての宇宙の現象、有らゆる萬有の事を研究する所といふ意義になつたけれども、其最初の意味は學者の團體といふことであつたのである。卽ち學者のコーポレーション、學者のボディーであつた。卽ち研究者の一團といふ事であつて、大學は、其始めの意味は、研究者といふ、人間の團體を稱したものである。詳細の事については一々述べないが、それから段々後に至つて、學問をなす場所と云ふことに變つて參つたのである。始めは研究者の一團といふことであつたが、

後に至つて研究をする場所、教授をする場所と云ふことに變化して來た。此大學の意味は矢張り今日に於ても生きてゐると思ふのである。苟くも大學である以上は眞理を研究し社會を指導するといふ精神的源泉を供給する學者の集合團でなければならぬと思ふのである。随つて是には研究と云ふことに全力を注がなければならない。高級の研究卽ち學究と申しては、語弊があるけれども、それぞ〳〵其人に應じて研究の程度がある。教授諸君は高級の研究をする、さうして世界の文化に貢獻する、學生諸君は又學生諸君の力に及ぶだけの研究をして、自分の智識或は精神的人格の完成を計る、又是に依つて模範國民となつて國家社會を裨益する。斯う云ふ覺悟が必要であるのである。是れについても、一方に於て如何に有形的の設備があつても、此最初の精神的の要素卽ち最初學者の團體と云ふ研究の精神が缺けて、唯學ぶ場所と云ふスペースの關係たけでは、大學は唯飾り物に過ぎないと思ふのである。併しながら、世界が進み、種々の知識が進んで來れば、研究の機關についても、昔の如く單純には往かない、随つて設備といふことに重きが置かれて來る。先刻名譽學長のいはれた通り、木造を煉瓦とし、大理石にすると云ふ、是は極めて善い事である、又さうしたいと思ふが、私共の微力では、仲々此木造を近い間に殘らず煉瓦にし、更に大理石にするといふことはどうかと、心配するのである。さういふことは、前途尙ほ多年を要するると考へるのである。目下の處では、兎に角建物のない所に建物を造るといふことが急なるを感

じて居る。無い所にビルディングを造らう、それから段々改善して行つても宜しいと思ふ狀態である。兎に角早稻田大學には爲す可き事が多々ある。是等については今後大いに當局の同僚竝に校友諸氏と共に硏究したいと思ふで居る。今日に於ては次第に進歩しつゝあるけれどもまだ〳〵＊＊仲々滿足し得る狀態でないといふことは繰返して述べて置く。先刻名譽學校の御話にも創業と守成と申すことがあり、守成と云ふ言葉は誤解を生じ易いと云ふことがあつた。誠に御尤もな次第である。どうしても常に進まなければ必ず退くに相違ないのである。同じ狀態にあつても、世界は



今上陛下東宮時代御手植月桂樹
（大學構內）

進みつゝある。早稻田が若し現狀に滿足して居れば、外が進んで行くから、詰り退歩である。早稻田大學の硏學の趣旨から見ても常に進歩的進取的でなければならない、寸時も遲滯を許さないのである。それで私は近來外國の大學校長、其他の訪問者がある際に此現狀を示して、早稻田は今建設中だ Waseda in construction と云つて說明して居る。亞米利加あたりの大理石を口にする人には此外觀は餘り立派には見えないから、今は建設の早稻田大學といつて居る。又 Waseda in progress だ、今進歩中の早稻田大學だから數年の後を見て呉れ、外形は此通りであるが、今進歩しつゝあると云ふ意味で話をして居る。是は唯一場の辭柄ではない。早稻田の人は總て此心掛けを以て進みたい、斯う考へて居る。

殊に今日に於ては世界大戰の結果世界を通じて人心不安の狀態に居る。極端な言葉を以ていふならば、世界は大なる苦痛の下に呻吟しつゝあるというても宜しいのであつて、私共は之を World in agony とも申したい。苦悶の世界とも申したいのである。物質界に於ける苦悶は勿論、精神界に於ても幾多の苦悶に艱みつゝある。斯の如き時機に於ては大學の使命、大學の職分と云ふものは一層大切である、重要であると思ふのである。大學はよく眞理を研究し、さうして此世界の人心の苦悶を救ひ、眞に人生を救ふ可き力を供給すべきものであらうと思ふのである。世界既に然りであるが、又我國に於ても、矢張り同じやうな形勢が現はれて居る。此事については餘

程愼重に研究し、眞に正しき道に人心を導き、又國民を導いて、健實なる發達をするやうに或る光明を此大學から發したいと思ふのである。近來右に傾くとか左に傾くとか云ふ言葉が世界を通て行はれる。最近に、歐羅巴に居る一留學生から獨逸の大學の近狀を報じて來た。又露西亞の現狀で獨逸邊に洩れて居ることについて、槪括して申して來た。獨逸大學は今皆右に傾いてしまつて居る。露西亞も右に傾きつゝあるといふやうなことを報じて來た。私は此右に傾くとか左に傾くとか云ふことはどちらも正當でないと考へて居る。一體傾くといふことは健全な進み方ではない。眞理といふものは決して片寄つてゐないものである。右に傾くもいかぬ、左に傾くもいかぬ。眞理は眞直であつて、眞直な道は傾きやう筈はないのであるから、傾いて居るとそこに何等かの缺點がある、私は斯う云ふやうに考へて居るのである。よく新とか舊とか云ふことを學問上についていふけれども眞理には新舊はない。今日に於ては種々な議論、種々な思想が現れてゐる而して世界を動かしつゝある。此際に於ては所謂獨立の研究といふ精神を正しく發揮することが非常に必要だらうと思ふのである。總ての知識を集めて而して、如何なる者と雖も十分に研究することは大學に於て缺く可らざることであるが、併しながら其研究に就ては獨立的の精神を以てしなければならぬのである。自家の獨立の見識により獨立の批判を爲すべき態度を以て總てのものを見なければ詰り奴隷的の研究に陷る、是は今日に於て殊に注意しなければならぬと思ふのである。西洋の研究、東洋の研究、ありとあらゆる事を獨立的に研究して世界文化に貢獻するやうな心掛けが必要だらうと思ふのである。極く露骨に述べると、從來は兎角飜譯的の傾きが多くあつた。私自身も是については、自から顧みて恥づることが多いのであるが、併し日本も最早獨立的の研究を必要とする、唯飜譯的だけではいけない、もう一歩を進めて創造的の狀態とならなければならないと信ずるのである。此創造的といふことは詰り獨立の研究から發するのである。此點は今日に於て最も注意すべきことであらうと思ふのである。

早稻田大學の今後については、種々の問題に關し夫々の機會に諸君の意見を伺ふことがあらうし、又色々御話する機會もあらう。今日は大學と申しても、何も狹苦しい少數者の集まりではない。或る時代には大學は極めて珍しい者であつて、少數の智識者だけの集まりであつたこともあつた。併し今日に於ては、大學は一口にいふと、深くなりつゝあると共に廣くなりつゝあると言うても宜からうと思ふ。研究と云ふ點は益々深く進みつゝあるが、智識は又一面に於て益々廣くなりつゝある。民衆化すると云うて宜しいか、デモクラティツクに進みつゝあると申して宜しいか大學の知識と云ふものは少數者の壟斷す可きものにあらずして國民全體を通じて廣くなる方に向つて居る。是は今日の大學の現況を見れば明白であるが、我國に於て苟くも國家社會の上に立つて相當に貢獻をするについては、どうしても高等教育が必要である。玆に大學は一面に於て研究

的學者を造出すと共に、一方に於て、社會に優秀なる働きを爲す可き有爲の人才を供給する必要がある。隨つて一方に於て學生を多く收容して高級智識を普及せしむる事が必要であるのである。出來得るならば日本國民全部を大學の學生にしたい、よし全部を大學の學生にせずとも、少くとも早稻田大學の精神が全部に行渡るやうにしたい。學問の獨立といふ精神に基いて、總ての人が此高等の智識を得るやうにしたいと思ふのである。

それから又是と同時に、大學も單調なものでなしに、色々複雜な組織に進みつゝあるといふ事は世界の狀態に照して明白な現象である。私は今一々事實は擧けないが、亞米利加あたりの大學を見ても、昔は大學といふものは極めて單純であつたが、今日は色々複雜な組織になつて居る。往時歐羅巴で大學といふと四つの Faculty を持つて居つた。最初は文學と神學と醫學と法學、此四つの敎授團を持つて居るのが大學で、其外の者は大學とはいはなかつたのである。併しながら此の如き單調の制度は今日一變しつゝある。今日は同じ大學の中にも、國家社會の必要に應じて色々な種類のものが含まれて居る。短期間の講習的の組織までも含まれて居る。時勢の必要に應じて自然さうなるのである。早稻田大學の如きも、大學令なる法令に依る大學があると同時に、專門部があり、又中等敎員を供給する高等師範部がある。又其他種々な附屬的のものが出來るかも知れないが、兎に角現在は極めて複雜である。是は自ら時勢の必要に應ずるものであつて、大學令に依る所の大學と是に付帶して國家社會に必要なる知識を供給する所の專門部高等學院其他の組織があり、共に一團となつて廣義の早稻田大學なる學園が成立して居る。是等の大學內の各部分も一方に於ては獨立して居るものゝ、其內容は相互に脈絡を通じ、純然たる有機的の組織を爲してゐるのである。此早稻田大學は恰かも大木のやうなものであつて、立派な根も生えて居る。早稻田大學の根は今日に於ては校友である、一萬五千有餘の校友である。それから本幹には大學部があり枝には專門部がある、色々複雜になつてゐるけれども、それはチリ〳〵バラ〳〵となつて居るのではなくしてちやんと其處に統一がある、Variety の內に Unity があつて早稻田大學は出來て居る。詰り有機的に統一があつて、さうして大學の眞の使命を全うする事が出來るのである。これと同じく私は學長の重責を負うて居るが、學長が何も一人で總ての事をするのではない。御承知の通り我々の同僚には學長の外に尙ほ四名の理事があつて、理事會で相談して萬事を定めて居る。是と同時に維持員會の決議を經て總ての事を實行する次第である。それから又經營の事務の方に於ては幾多の部に分れて之を分掌して居るが、大學の最も重大なる所の責任を負はれて居るのは卽ち早稻田大學の敎授團である。敎授諸君が先づ大學の先頭に立つて其大切なる職務を有つて居るとは申す迄もない。是と同時に學生諸君が此大學の存在の大部分の意味を占めて居る。卽ち敎授團、學生及び事務部が皆協力一致し、其間に有機的關係があつて、早稻田大學と云ふものが始め

て完全に維持され、又發展をなし得るのである。早稲田大學の事業は何等私的性質を有しない事は言ふ迄もない、所謂公共的事業であつて、其目的とする所は國家社會に貢獻する、眞理を研究して國家社會に貢獻し、更に進んでは世界人類を裨益する、斯う云ふのが早稲田大學の使命である。甚だ大きなことを述べたが、遠きに至るには先づ近きより始めなければならぬ。卽ち前に述べた設備其他内容の充實が當面の問題である。此の如き次第であつて、私が淺學不才の身を以て此重責を負ふことは甚だ恐縮に堪へないのであるが、責任を負うて居る間は決して自から避けることはしない。一身を犧牲にしても、誠心誠意其職を盡す考を有つて居るから、どうか諸君に於かれても十分の御援助を願ひたいと思ふのである。

（大正十年十月三日早稲田大學校庭に於ける學長就任式當時の演說）

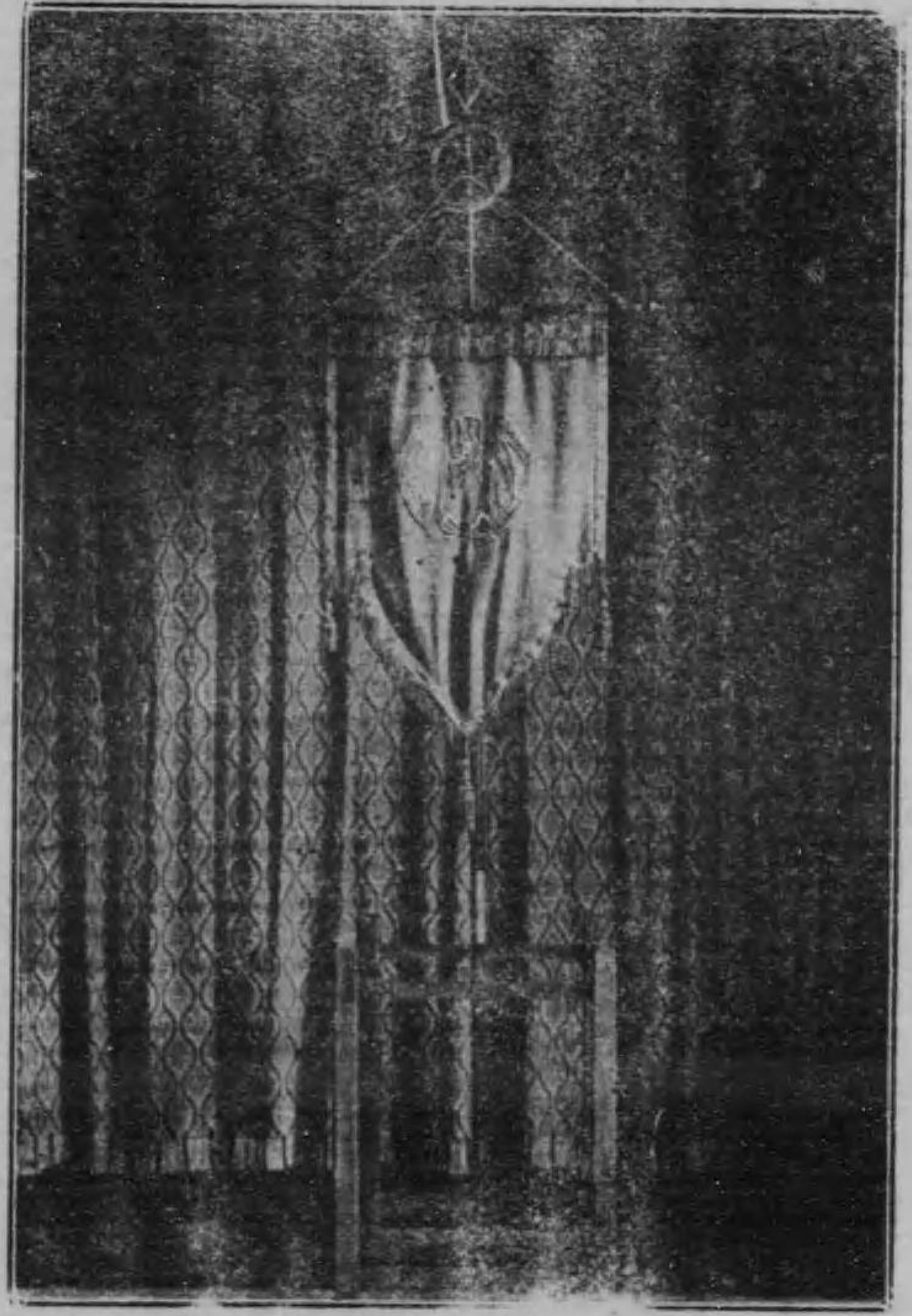
學苑の計畫

早稲田大學前學長
法學博士　平沼淑郎

本學年の始業式を擧行するに當つて、一言諸君に申述べたいと考へる。只今こゝに來集せられて居る所の諸君は、大學部、專門部、高等師範部、高等豫科、高等學院總ての學生を網羅してるるのである。非常なる人數であつて、この席に悉く容れることを得ないので、窓の外に佇んで居られる諸君もあるといふことは頗る遺憾である。元來本部の中央庭にテントを張つて、その中で式を擧ぐるはずであつた。然るに今朝來の烈風の爲に頗る危險を感じた。動もするとテントが顚覆せんとする。故に急遽場所を變じて、高等學院の講堂兼雨天體操場にしたのである。これは頗

る遺憾とする所である。けれども、また止むを得ざるに出でたのである。

今日集まられた所の諸君の中で、從來我が學苑の各科部に於いて修業せられつゝあつた所の諸君と、今回新たに入學せられた所の諸君との二種類がある。新に入られた所の諸君は、專門部各科、高等師範部並に高＊等學院に入られたのである。高等學院は第一部と第二部とに分れて居る。第一部は既に昨年開始して居るのである。今年は第二部を開始したのである。第一部は中學第四年の修了程度、これを標準として入學せしめたのである。昨年は第一部の入學を許し、今年は合せて第二部の入學をも許したのである。此第二部に入學せられた所の諸君と新に第一部第一學年に入學せられた所の諸君とが即ち高等學院の新入學生である。又專門部は政治經濟科、商科、法律科、この三科があつて、この三科に入學を許可せられた所の諸君がこの中に居られるのである。また高等師範部の新入學生も列席して居られるのである。既に在學せられて居る所の諸君に對しては、屢ゝ我が大學の敎旨を説明する所の機會があつた。新に入學せられた所の諸君に對しては、今日始めてこれを訓示するのである。



早稲田大學校旗

敎旨は印刷物によつて、また掲示によつて、これを示してある。これに就いて御覽になれば直ぐ分ることである。學問の獨立、模範國民の造就、是れが最も重要なる點であると常々考へて居る。學問の獨立、これは早稲田大學の前身たるところの專門學校の創立以來、こゝに御列席の總長閣下を始めとして學苑の人々が主唱したることで、終始一貫以て今日に至つて居るのである。學問の獨立といへば、その意義に種々なる方面がある。政治より獨立するといふ意義もある。社會の俗惡なる風潮から獨立するといふ意義もある。また日本に於いて特得の研究をして特得の學問を成就させるといふ意義もある。種々なる方面からして學問の獨立を圖らなければならぬといふことが本大學本來の趣旨である。この趣旨によつて學問研究を重ね、以て世界に誇るべき所の人物を輩出しなければならぬといふのである。このことに就いては、長く御話をすれば、種々なる個條があるのであるけれども、大略これに止めて措く。なほ後日機會ある毎にこの趣旨を敷衍し

て申し上げたいと考へて居る。

第二の模範國民の造就、諸君は國民の模範儀表となるべき責任を有して居る。高等師範部であつても、専門部であつても。大學部であつても、またこれから大學部に進まるゝ所の高等學院の諸君であつても、いづれも同じ事である。皆高等なる學術を修める所の人である。さうすれば、社會の俗悪なる風潮に誘はるゝにあらずして、みづから社會各般の方面に對して儀表となつて、これを指導すると云ふ責務があるのである。この覺悟を以て努力勉勵すれば、個人の人格を養成することも出來る。共同生活に於ける所の人格の修練もなし得られるのである。種々なる條項がこの數語の中に含まれて居るのであるが、要するに諸君の如き高等學術を修むる人々が模範儀表となつて、さうして我が大日本帝國の文運文化を進め、遂にこれをして世界に雄飛する所の國とならしめるといふことに着眼留意しなければならぬ。かう私は考へる。私が考へるばかりではない。我が早稲田學苑に於いては、何人も皆この希望を抱いて居るのである。かう申したならば、諸君はいづれも道徳修養の方面に向つて、積極的にも消極的にも、勇往邁進しなければならぬといふことになる。消極的といふと、或は語弊があるかも知らんが、しかし諸君は積極的に進んで善を爲すといふ考をもたなければならぬとは論ずるまでもないことである。而して進んで善をなすといふならば、自づから悪をなすなといふ消極の意味も含蓄して居るやうな理由より、積極消極といふ

大隈侯爵邸庭園書院前

語を用ひたのである。諸君はこの心得を以て今後益々奮發努力して、諸君の一身一家は勿論、我が學苑の名聲を天下否世界に擧ぐるといふ考をもつてもらひたいと思ふのである。この希望を實現しようとするには、もとより我々當局者また實際教授指導の任に當られる所の諸君に重大なる責務があるのであるが、また學生諸君にして努力奮勵せずんば、如何にしても彼岸の地に到達することを得ないと信ずる。要するに諸君の努力が與つて大いに力ありと申さんければならぬ。

この機會を利用して、一二、學苑の事業に就いて諸君に示して置きたいと思ふことがある。諸君としても、一應これを知つて置いて然かるべきことと思ふ。第一は高等學院に就いてである。

學院新築の工事は昨年以來着手致して、今年に至つて始めて全部落成を告げた。さうして諸君を收容するを得るに至つたことは諸君と共に御同慶のことと考へる。こゝに於いて、大學令實施以來、我々の目的として居つた所の第一着手の事業が、その緒に就いたのである。

次に高等教育機關としての我が學苑の歩を進めるに當つて、その中心とすべき所の圖書館の擴張を計り、これに關聯する所の研究室の設備を充實する。かういふことは實は目睫の間に迫つて居る所の重要なる事業である。この事業は夙に着手せなければならぬことであつたけれども、經營の上からして緩急を圖る必要があつたので、高等學院の新築を先にして、これを後にしたのである。この圖書館擴張の工事は多分今年の秋から起工することにならうと思ふ。さうすると諸君の在學中には、これを利用する所の機會が生じ得るかと想像する。またさう信じて居る。私は樂んでこの事業の竣功を待つて居るのである。その外大學部專門部その他各部科の改善に伴ふ所の學則の改正、男女共學を許す所の聽講生規則、朝鮮臺灣支那人の入學に關する特科生規則等を列擧すれば多々あるけれども、それは暫く略して、最も大なる計畫に關するものを擧げて御話をしたのである。卽ち我々は今後に於いてかくの如き事をするといふ計畫をもつて居るといふことを、諸君に於いて知つて置いてもらひたいのである。

第三に諸君の一身に痛切に關係のあることが一つある。それは何であるか。これに就いて一言したいのである。卽ち體育のことである。固より今日に至るまで諸君は體育を怠つて居るとは申さぬ。種々な遊戲を行つたり、劍術、柔術、弓術、相撲、蹴鞠、競走、テニス、ベースボールも練習して居る。諸君は各その好む所に從つて、身體を練磨して居るのである。これは固より私もよく知つて居る所である。しかしながら、熟々考へて見ると、體育が各學生に普及して居るのではない。まだ日本國民と外國の國民とを比較すると、どうも體力の點に於いて誇ることを得ないやうに私は認める。斯道の人に問うて見て、さう申すのである。決して私の一家言ではない、第一身體の大きさからして違ふ。こゝに御列席のジーマン先生と諸君とを比べると大した違ひを見るのである。身體のことは一例に過ぎないのであるが、その他の點に於いて、日本人が他の文明各國の人々に及ばぬといふことは世間の定論である。故に今後はこの點に就いて大いに考慮を運らす必要がある。この方面に於いての改善を行ふには、今日の規模を改正しなければならぬと思ふのである。少數の人或は一部分の人が競技を行つて居るといふだけのことでは、どうしても體育は振はない。之を振ひ興すに就いては、何か他に方法を求めなければならぬ。體育に關する事務をも整頓しなければならぬ。大いに設備を擴張しなければならぬ。こゝに於て體育部規則なるものを新に設けたのである。その詳細は、いづれその局に當る人々から御話もあらうし、まだ他日これを述ぶる機會もあると思ふが、今日はその大體を述べて置かうと思ふ。體育の事務を整頓す

ることが最も必要なることであるからして、先づ體育部を學長直轄の下に置く、さうして其統一を圖る、設備の充實を計る。設備の充實と申しても、固より緩急がある。財政上の都合もある。急遽に總てを整備するといふことは不可能である。けれども事情の許す限り、着々計畫を進めて見ようと考へて居る。この事に就いては、三月の學報を御覧になつた方は御存知だらうと思ふが、理事田中博士の執筆せられた所の體育に關する論說が載つて居る。これは諸君に於いて必らず一讀せられんことを希望する。經營者側に於いての意見も、要するにこの議論と異なつたものではない。このことは直接諸君の身に關係を有することであるからして、特に御話して置くのである。もつとも實行の方法に就いてはなほ協議を重ねて定むるはずである。こゝには大方針のみを摘んで申したのである。

それからして、高等學院、專門部、高等師範部には直接關係はないかも知れぬが、學位授與に關する規定が出來た。是は各學部教授會に於て委員を選定して、さうして定めたものである。即ち大學の特權である所の學位授與に關する規定が出來たのである。この事もこゝに併せて御知らせ申して置く事が必要であると思ふ。學位授與は大學の特權である。これがなければ、大學といふものは或る意味からいふと有名無實のものになる。そこで學位令に準據して、この規定を設けたのである。それで諸君は、何學部何科に屬するとを問はず、何人でもこの規定により論文を提出して學位を請求することを得るのである。そこで諸君は皆奮發努力勉勵して、今日こゝに來會せられた所の諸君は悉く皆學位を授けられるやうになつたならば宜しからうと思ふ。しかし容易にはこれを與へない。たゞみんなが學位を授かるやうになつたらば、嬉しからうと思ふのである。

その外、訓育の上に就いても、折に觸れ、機に應じて各部長、教務主任、院長から訓示せられる所があるべきはずになつて居る。私は今日たゞ大體を述べたに過ぎないのである。今日は學年開始の日である。一年の計は元日に定まるといふ昔の諺もある。先づ授業開始の今日に於いて特にこのことを述べて置く。諸君は從來も奮發努力されただらうけれども、今日よりは、更に大なる奮發努力を發揮して、而して社會有爲の人物となり、以て國家に寄與せらるる所多からんことを期するのすである。（大正十年四月十六日早稻田大學附屬高等學院雨天體操場に於ける始業式當日の訓辭）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

早稲田大學教職員

名譽教職員

名譽學長　法學博士　高田早苗
名譽教授　文學博士　坪内雄藏
名譽理事　市島謙吉

本部

學長　法學博士　鹽澤昌貞
理事　法學博士　田中穗積
理事　伯爵　松平賴壽
理事　工學博士　淺野應輔
理事　法學博士　鹽澤昌貞
理事　法學博士　平沼淑郎
會計監督　宮田脩
會計監督　阪本三郎
幹事　前田多藏
副幹事 會計主任　土屋啓造
庶務課主任　鰾崎敏雄
教務課主任　中村芳雄
學生課主任　望月嘉三郎

政治經濟學部々長　安部磯雄
法學部々長　寺尾元彥
文學部々長　文學博士　金子馬治
商學部々長　法學博士　田中穗積
理工學部々長　理學博士　山本忠興
第一高等學院々長　中島半次郎

第二高等學院々長　杉山重義
圖書館々長　安部磯雄
工手學校々長　理學博士　德永重康

教授講師（イロハ順）

政治經濟學部及政治經濟科

猪俣津南雄　出井盛之　馬場哲哉
服部文四郎　原久一郎　農學博士　橋本傳左右衞門
二階堂保則　新田孫三郎　本多淺治郎
太田正孝　大槻信治　大久保常正
大山郁夫　法學博士　岡田朝太郎　渡俊治
法學博士　河津暹　神尾錠吉　法學博士　横田秀雄
横山有策　高橋清吾　立川長宏
法學博士　田中穗積　伊達保美　法學博士　副島義一
法學博士　中村進午　中村萬吉　內ヶ崎作三郎
宇都宮鼎　法學博士　浮田和民　梅若誠太郎
久松廉吾　草野豹一郎　山崎貞
山本勇造　文學博士　山岸光宣　松井等
法學博士　牧野菊之助　煙山專太郎　五來欣造
江間道助　文學博士　遠藤隆吉　安部磯雄
青柳篤恒　法學博士　粟津清亮　西條八十
菊池三九郎　遊佐慶夫　法學博士　鹽澤昌貞
志賀重昂　信夫淳平　島村民藏
島村他三郎　清水行恕　法學博士　平沼淑郎
鈴木貫一郎

法學部及法科

法學博士　岩田一郎　伊知地純正　井上孚麿
今村恭太郎　出井盛之　大原昇
大森洪太　法學博士　岡田朝太郎　神谷健夫
法學博士　横田秀雄　立石謙輔　法學博士　副島義一
中西用德　法學博士　中村進午　中村萬吉

中村仲	草野豹一郎	柳川勝二
法學博士 松岡義正	松野祐裔	ヘルマン・フロイドル・スペルゲル
法學博士 二上兵治	文學博士 遠藤隆吉	寺尾元彦
喜多壯一郎	木村尙達	菊池三九郎
遊佐慶夫	法學博士 鹽澤昌貞	島田鐵吉
島村他三郎	清水孝藏	清水行恕
椎津盛一	法學博士 鈴木喜三郎	杉田金之助

文學部

伊藤輔利	文學博士 市村瓚次郎	五十嵐力
飯田敏雄	馬場哲哉	原久一郎
原隨園	二階堂保則	西村眞次
本田親二	本間久雄	文學博士 大瀨甚太郎
小田內通敏	アレキサンダー・ワノーフスキー	片上伸
勝俣銓吉郎	文學博士 金子馬治	横山有策
吉田源次郎	吉江喬松	谷崎精二
田中喜一	高杉瀧藏	武田豐四郎
伊達保美	津田左右吉	中島半次郎
馬田行啓	法學博士 浮田和民	久保良英
窪田通治	文學博士 桑木嚴翼	熊崎武良溫
山口剛	文學博士 山岸光宣	山本勇造
八杉貞利	牧野謙次郎	增田藤之助
煙山專太郎	ヘルマン・フロイドル・スペルゲル	深澤由次郎
五來欣造	エッチ・ピー・ペニンホフ	江間道助
文學博士 遠藤隆吉	西條八十	定金右源二
紀淑雄	岸本能武太	清水泰次
文學博士 椎尾辨匡	法學博士 鹽澤昌貞	信夫淳平
島村民藏	デビット・シエリング	關與三郎
杉森孝次郎	鈴木貫一郎	

商學部及商科

伊地知純正	出井盛之	馬場哲哉

服部文四郎	大東直太郎	太田哲三
大久保常正	渡　俊治	渡邊　明
法學博士 河津　暹	勝俣銓吉郎	筧　正太郎
神尾錠吉	法學博士 横田秀雄	立川長宏
法學博士 田中穗積	高杉瀧藏	武信由太郎
伊達保美	中田　浩	法學博士 中村進午
柳樂健治	宇都宮鼎	柳川勝二
山本勇造	小林行昌	五來欣造
古楠顯理	江間道助	寺尾元彦
青柳篤恒	法學博士 粟津清亮	佐野　學
西條八十	佐久間原	北澤新次郎
遊佐慶夫	島村民藏	樋口清策
法學博士 平沼淑郎	關野九郎	杉山重義
鈴木貫一郎		

理工學部

伊原貞敏	工學博士 伊東忠太	市川繁彌
井上克己	井上誠一	今井兼次
石井　定	西松唯一	帆足竹治
理學博士 德永重康	德永　庸	寫井六造
富永　齊	張　忠一	越智誠二
大澤一郎	大隅菊次郎	岡田純三
岡田信一郎	工學博士 沖　巖	渡部寅次郎
河合　勇	川原田政太郎	片山勝藏
勝田　一	龜山直人	神木健介
吉原重威	吉田享二	吉田謹平
吉田豐吉	米元晉一	高田勇雄
高津　清	工學博士 田中不二	竹中二郎
竹内六藏	竹下清松	武富　昇
武石弘三郎	坪内　信	堤　秀夫
都築謙雄	内藤多仲	長竹信次

長屋修吉　村田榮太郎　氏家謙曹
上田大助　野並龜治　能村千別
野村堅　野村松三　野口尙一
黑川兼三郎　工學博士 鯨井恒太郎　山內不二雄
山內弘　山內眞三雄　山口榮一
山口潤藏　工學博士 山本忠興　山本八十吉
山本五郎　松井元太郎　松尾靈彥
松本容吉　松繩信太　牧銳夫
男爵 福原俊丸　藤井鹿三郎　工學博士 小林久平
後藤曠二　小室靜夫　小穴秀一
今和二郎　江藤玄三　青木芳彥
青山秀三郎　阿部良夫　淺井郁太郎
工學博士 淺野應輔　子爵 秋田重季　工學博士 佐藤功一
佐野志郎　北浦重之　北澤武男
工學博士 密田良太郎　三宅當時　水野範之助

法學博士 鹽澤昌貞　志水直彥　工學博士 遊澤元治
廣瀨誠一　兵藤藤吉　肥田丈夫
師岡秀麿　森芳太郎　鈴木德藏

高等師範部

イー・エス・ケート　五十嵐力　伊知地純正
西村眞次　保科孝一　岡田正美
尾上八郎　勝俣銓吉郎　桂五十郎
文學博士 金子馬治　上井磯吉　橫山有策
高杉瀧藏　田中喜一　伊達保美
永井一孝　中島半次郎　法學博士 中村進午
中桐確太郎　熊本謙二郎　矢口達
山口剛　松平康國　牧一
牧野謙次郎　增田藤之助　煙山專太郎
深澤由次郎　古楠顯理　青柳篤恒
安藤正次　菊池三九郎　岸本能武太

宮井安吉　繁野政瑠

高等學院

伊藤康安　五十嵐力　池田清
石井信二　石原庄平　飯田敏雄
馬場哲哉　秦孝道　原久一郎
長谷川慶三郎　西村眞次　富田逸二郎
渡俊治　アレキサンダー・ワノーフスキー　川合孝太郎
河野與一　香川冬夫　片上伸
勝俣銓吉郎　影山千萬樹　梶島二郎
吉川秀雄　吉田源次郎　吉江喬松
高谷實太郎　高見豊　高橋善吉
平尚明　デピット・シェリンク　民野雄平
外岡茂十郎　土橋仁之進　中村仲
中桐確太郎　中島半次郎　中城陟
内ケ崎作三郎　野々村戒三　梅若誠太郎

岡次郎　窪田通治　久松廉吾
矢口達　山口剛　山崎貞
文學博士 山岸光宣　山本勇造　前橋孝義
松永材　松島鉦四郎　牧野謙次郎
牧野鑑造　ヘルマン・フロイドル・スペルゲル　深澤由次郎
舟木重信　藤野了祐　衣川義雄
五來欣造　古楠顯理　エッチ・ザー・スペンサー
エル・ザー・クロッカー　江間道助　阿部良夫
青柳篤恒　會津常治　西條八十
佐藤仁之助　定金右源二　佐野學
佐久間原　崎田喜太郎　北澤新次郎
南晴耕　繁野政瑠　清水泰次
日高只一　杉山重義　鈴木貫一郎

工手學校

伊藤直和
伊原貞敏
今井兼次
原田長松
帆足竹治

理學博士

徳永重康
大澤一郎
緒方一三
大久保常正
川原田政太郎
加藤觀三
吉田謙三
立川長宏
高井亮太郎
坪內信

岩崎篤太郎
石井定
井上邦治
萩本文海
星野富太郎
徳永庸
大隅菊次郎
織田隆
岡村千曳
片山勝藏
吉田享二

法學博士

田中穗積
民野雄平
高橋勇
土屋詮教

岩崎富久
岩野城生
坂駒雄
西村眞次
本田親二
富田逸二郎
岡田信一郎

工學博士

沖巖
渡部寅次郎
片山利久
吉原重威
武田修三郎
高村侃介
高橋末治郎
內藤多仲

中村琢治郎
梅若誠太郎
上井磯吉
野村堅
久松廉吾
山內弘
眞隅隆介
增田綱
藤井鹿三郎
藤田信達
小室靜夫
小林薰
足立震太郎
淺井郁太郎

子爵

足利於菟丸

奈良久助

法學博士

浮田和民
氏家謙曹
野村松三
楠本幹夫
山口義勝
松本容吉
松木岸三
藤井隣次
藤澤安三郎
後藤量介
小泉素彥

子爵

秋田重季
新井忠吉
粟屋鶉二

村田榮太郎
上原靜夫
上野景明
桑田福太郎

工學博士

山本忠興
山田胖
牧野鑑造
間野次郎
藤本慶祐
今和二郎
河野通彌太
寺澤信計
有元岩鶴
阿部新作

工學博士

佐藤功一

定金右源二　岸畑久吉　木村三郎
北澤武男　桐山均一　三宅當時
道田貞治　三浦七郎　三村宗一
工學博士 鹽澤昌貞　篠原喬亮　志水直彦
下村孝一　日高藤麿　森米次郎
師岡秀麿　鈴木德藏

維持員（イロハ順）

維持員會々長 侯爵 大隈信常

市島謙吉　早速整爾　渡邊亨
文學博士 金子馬治　法學博士 高田早苗　法學博士 田中穗積
文學博士 坪内雄藏　中島半次郎　上原鹿造
浦邊襄夫　山田英太郎　伯爵 松平賴壽
增田義一　松山忠二郎　昆田文次郎

寺尾元彦　工學博士 淺野應輔　三枝守富
阪本三郎　宮田修　子爵 澁澤榮一
法學博士 鹽澤昌貞　法學博士 平沼淑郎　砂川雄峻

評議員（イロハ順）

評議員會々長 伯爵 松平賴壽

法學博士 井上辰九郎　井上廣居　五十嵐力
池田龍一　石井政吉　石原善三郎
石黒大次郎　法學博士 原嘉道　早速整爾
服部文四郎　羽田智證　埴原正直
橋本良藏　西尾謙吉　本多浅治郎
理學博士 德永重康　作野賢造　富田逸二郎
大橋誠一　小川爲次郎　法學博士 小山溫
小野駿一　大濱忠三郎　渡邊亨

渡邊惣右衛門　若林成昭　川井正進
文學博士 金子馬治　上遠野富之助　片上仲
柏原文太郎　工學博士 沖巖　金澤種次郎
嘉納虎太郎　法學博士 横田秀雄　横山有策
法學博士 田中穂積　高杉瀧藏　民野雄平
法學博士 高根義人　高山圭三　谷村一太郎
田中四郎左衛門　法學博士 副島義一　坪谷善四郎
法學博士 中村進午　中島半次郎　永井一孝
中桐確太郎　中野禮四郎　中川末吉
中村康之助　中村萬吉　中村祐吉
中村房次郎　中野鐵平　内藤多仲
並河正　法學博士 浮田和民　内ヶ崎作三郎
梅若誠太郎　上原鹿造　浦邊襄夫
能村千別　野間五造　栗山賚四郎
山田英太郎　山田甫　山澤俊夫

工學博士 山本忠興　山内不二雄　山本愼平
松平康國　町田忠次　牧野謙次郎
増田義一　松山忠二郎　松川駒次郎
前橋孝義　男爵 前島彌　松井郡治
松澤知司　松村謙三　増子喜一郎
文學博士 藤井健治郎　降旗元太郎　昆田文次郎
小林行昌　小林久平　小山松壽
小竹文次郎　五來欣造　寺尾元彦
工學博士 淺野應輔　安部磯雄　青柳篤恒
工學博士 佐藤功一　齋藤和太郎　齋藤隆夫
阪本三郎　菊池三九郎　紀淑雄
北澤新次郎　岸本市太郎　遊佐慶夫
宮田脩　宮井安吉　文學博士 三宅雄二郎
水野正己　南方常楠　法學博士 鹽澤昌貞
莊保勝藏　法學博士 平沼淑郎　平田譲衛

廣井一　樋口清策　久富久吉
森田卓爾　關和知　砂川雄峻
杉山重義　杉田駿　鈴木寅彦
鈴木茂雄

財團法人 早稲田大學校規

（大正七年九月三日制定）
（大正九年五月十四日改正）

第一章　總則

第一條　本財團法人ハ早稲田大學ト稱ス

第二條　本大學ハ各種專門學術ノ教授及研究ヲ目的トス

第三條　本大學事務所ハ東京府豐多摩郡戸塚町大字下戸塚六百四拾七番地ニ設置ス

第二章　資産

第四條　本大學ノ資産ハ別册財産目錄ニ掲載ス

第五條　本大學資産ノ管理使用及處分ハ維持員會ノ決議ニ依リ理事之ヲ行フ

第六條　本大學解散ノ場合ニハ殘餘ノ資産中設立者ノ寄附ニ係ル土地ハ設立者又ハ其家督相續人ニ歸屬シ其他ノ資産ハ類似ノ目的ノ爲ニ處分ス

第三章　維持員及維持員會

第七條　本大學ニ維持員貳拾五名ヲ置ク

第八條　維持員ヲ分チテ終身維持員及有期維持員トス

第九條　終身維持員ハ左ノ二種ヨリ成ル

一、設立者又ハ其家督相續人若シクハ其代表者　壹名
二、本大學總長ノ推薦シタル者　五名

第十條　有期維持員ハ左ノ二種ヨリ成ル

一、評議員會ニ於テ評議員中ヨリ選出シタル者

拾四名

但内七名ハ第六十七條第二號ノ評議員中ヨリ選出スルモノトス

二、功勞者及寄附者中ヨリ維持員會ノ推薦シタル者

五　名

第十一條　有期維持員ノ任期ハ三箇年トス

第十二條　維持員ノ資格ハ左記ノ事由ニ依リテ消滅ス

一、任期滿了

二、死　亡

三、禁治產、準禁治產、破產

但評議員中ヨリ選出セラレタル者ハ任期内ト雖モ評議員ノ資格消滅スルトキハ退任スルモノトス

四、辭　職

五、除　名

第十三條　維持員ノ除名ハ他ノ維持員五分ノ四以上ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

第十四條　維持員ノ補缺ハ第九條及第十條ニ依リ之ヲ行フ

第十五條　有期維持員補缺ノ場合ニ於ケル後任者ノ任期ハ前任者ノ任期ニ依ル

第十六條　維持員會ハ維持員ヲ以テ組織シ本大學ニ關スル重要ナル事件ヲ決定ス

第十七條　維持員會ハ定時維時員會及臨時維持員會ノ二種トス

第十八條　定時維持員會ハ毎月一回學長之ヲ招集ス

第十九條　臨時維持員會ハ學長ニ於テ必要ト認メタルトキ又ハ維持員五名以上ノ請求アリタルトキ學長之ヲ招集ス

第二十條　維持員會ハ維持員ノ互選ヲ以テ會長副會長各壹名ヲ置ク

第二十一條　會長ハ議事ヲ整理ス會長事故アルトキハ副會長之ヲ代理ス

第三十二條　維持員會ヲ招集スルニハ定時維持員會ハ少クトモ五日以前ニ臨時維持員會ハ少クトモ二日以前ニ會議ノ目的タル事項ヲ通知スベシ

但出席全員ノ同意アルトキハ豫メ通知セザル事項ヲ附議スルコトヲ得

第二十三條　維持員會ハ維持員三分ノ一以上出席スルニ非ザレバ開會スルコトヲ得ズ

第二十四條　維持員會ノ決議ハ出席維持員ノ過半數ニ依ル

第四章　總長、理事、監事

第二十五條　本大學ニ總長、理事、監事ヲ置ク

第二十六條　總長ハ維持員會之ヲ推薦シ本大學ノ最高統率者トス

第二十七條　理事ハ五名以内トシ維持員ノ互選ヲ以テ之ヲ定ム

第二十八條　理事ハ維持員會ノ決議ニ基キ一切ノ經營ニ任ズ

第二十九條　維持員會ノ決議ヲ以テ理事中壹名ヲ學長トシ本大學ノ代表者トス

第三十條　學長缺ケタルトキ又ハ事故ニヨリ職務ヲ行フコト能ハザルトキハ他ノ理事ノ互選ヲ以テ定メタル理事之ヲ代理ス

第三十一條　監事ハ貳名トシ維持員ノ互選ヲ以テ之ヲ定メ會計監督ト稱ス

第三十二條　監事ハ維持員會ノ決議ヲ以テ定メタル會計規定ニ依リ會計ノ檢査ヲ行フ

第三十三條　理事及監事ノ在職期限ハ三箇年トス

但有期維持員中ヨリ選擧セラレタル理事及監事ハ在職期限內ト雖モ維持員ノ資格消滅ト共ニ退職スルモノトス

第三十四條　理事及監事ノ資格消滅ハ第十二條及第十三條ノ規定ヲ準用ス

第三十五條　理事及監事補缺ノ場合ニ於ケル後任者ノ在職期限ハ前任者ノ在職期限ニ依ル

第五章　計　算

第三十六條　本大學ノ豫算及決算ハ維持員會ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム

第三十七條　本大學ノ會計ハ維持員會ノ決議ヲ以テ定メタル會計規定ニ依リ之ヲ處理ス

第六章　教授、助教授、講師及教授會

第三十八條　本大學ニ教授助教授及講師ヲ置ク

第三十九條　教授助教授及講師ハ學科ノ教授及研究ニ從事シ學生ノ指導ニ任ズ

第四十條　教授及助教授ノ任命竝ニ講師ノ囑託ハ維持員會ノ決議ヲ以テ定メタル規定ニ依リ學長之ヲ行フ

第四十一條　教授助教授及講師ハ左ノ五學部ニ分屬ス

但他ノ學部ニ兼屬スルコトヲ得

一、政治經濟學部

二、法　學　部

三、文　學　部

四、商　學　部

五、理工學部

第四十二條　各學部ニ學部長壹名ヲ置ク

第四十三條　各學部長ハ其學部所屬ノ教授會ニ於テ互選シタル候補者貳名中ヨリ維持員會ノ決議ヲ經

テ學長之ヲ任命ス

第四十四條　各學部長ハ維持員會ニ出席シテ意見ヲ陳述スルコトヲ得

第四十五條　各學部長ノ在職期限ハ三箇年トス

但補缺ノ場合ニ於ケル後任者ノ在職期限ハ前任者ノ在職期限ニ依ル

第四十六條　教授及助教授ノ解職ハ維持員會ノ決議ヲ以テ學長之ヲ行フ

但此場合ニ於ケル維持員會ノ決議ハ第十三條ノ規定ヲ準用ス

第四十七條　本大學ハ第四十一條規定ノ學部ニ分チテ教授會ヲ置ク

第四十八條　教授會ハ各學部ノ教授ヲ以テ組織ス

第四十九條　教授會ハ左記ノ事項ヲ決議ス

一、教授及研究ニ關スル件

二、學生ノ指導訓練ニ關スル件

三、學位ニ關スル件

四、其他學長又ハ維持員會ヨリ諮問セラレタル件

第五十條　教授會ハ第四十三條ニ依リ學部長候補者ヲ互選ス

第五十一條　教授會ハ第六十七條第二號ニ依リ各學部五名宛ノ評議員ヲ互選ス

第五十二條　教授會ハ專門學科ニ就キテ部會ヲ開クコトヲ得

第五十三條　教授會ハ學長ノ承認ヲ經テ學部長之ヲ招集ス

第五十四條　教授會ノ議事ハ學部長之ヲ整理ス

第五十五條　學長ハ必要ト認ムルトキハ各學部聯合教授會ヲ招集スルコヲ得

第五十六條　聯合教授會ハ開會每ニ出席教授ノ互選ヲ以テ議長ヲ定ム

第五十七條　教授會ハ所屬教授ノ三分ノ一以上聯合

一教授會ハ聯合各學部教授ノ四分ノ一以上出席スルニ非ザレバ開會スルコトヲ得ズ

第五十八條　教授會及聯合教授會ノ決議ハ第二十四條ノ規定ヲ準用ス

第五十九條　維持員ハ教授會及聯合教授會ニ出席シテ意見ヲ陳述スルコトヲ得

第六十條　教授會ハ他學部教授竝ニ助教授講師ノ出席ヲ求メテ其意見ヲ聽取スルコトヲ得

第六十一條　教授會及聯合教授會ノ決議ハ維持員會ニ於テ之ヲ決定ス

第七章　圖書館長及附屬學校長

第六十二條　本大學ニ圖書館及附屬學校ヲ置ク

第六十三條　圖書館ニ館長附屬學校ニ校長壹名ヲ置キ維持員會ノ決議ニ依リ學長之ヲ任免ス

第六十四條　圖書館長及附屬學校長ハ維持員會ノ決議ニ基キ所管ノ事務ヲ處理ス

第六十五條　圖書館長及附屬學校長ノ在職期限ハ三箇年トス

第八章　評議員及評議員會

第六十六條　本大學ニ評議員ヲ置ク

第六十七條　評議員ハ左ノ四種トシ學長之ヲ囑託ス

一、總長及維持員會ニ於テ本大學關係者中ヨリ推薦シタル者　參拾五名

二、教授會ニ於テ教授中ヨリ選出シタル者　貳拾五名

三、中央校友會ニ於テ其會員中ヨリ選出シタル者　貳拾名

四、地方校友會ニ於テ其會員中ヨリ選出シタル者　若干名

第六十八條　評議員ノ任期ハ三箇年トス

第六十九條　評議員會ハ評議員ヲ以テ組織ス

第七十條　評議員會ハ毎年一回學長之ヲ招集ス

但學長ニ於テ必要ト認メタルトキ又ハ評議員四分ノ一以上ノ請求アリタルトキハ臨時會ヲ開クコトヲ得

第七十一條　評議員會ハ評議員四分ノ一以上出席スルニ非ザレバ開會スルコトヲ得ズ

第七十二條　評議員會ハ評議員ノ互選ヲ以テ會長副會長各壹名ヲ置ク

第七十三條　會長ハ評議員會ノ議事ヲ整理ス會長事故アルトキハ副會長之ヲ代理ス

第七十四條　評議員會ハ第十條第一號ニ依リ維持員ヲ選出ス

第七十五條　維持員ハ評議員會ニ出席シテ意見ヲ陳述スルコトヲ得

第七十六條　學長ハ毎年ノ學事及會計狀況ヲ評議員會ニ報告シテ其承認ヲ求ムルコトヲ要ス

第七十七條　評議員會ハ其決議ヲ以テ意見ヲ維持員會ニ提出スルコトヲ得

第七十八條　評議員ノ補缺ハ第六十七條ニ依リ之ヲ行フ

但便宜之ヲ延期スルコトヲ得

第七十九條　第十二條第十三條第十五條第二十二條及第二十四條ノ規定ハ之ヲ評議員及評議員會ニ準用ス

第九章　寄附行爲ノ改定

第八十條　本寄附行爲ハ維持員五分ノ四以上ノ同意ニ依リ主務官廳ノ認可ヲ經テ之ヲ改定スルコトヲ得

附則

第一條　本寄附行爲ニ於テ設立者ト稱スルハ侯爵大隈重信トス

第二條　舊寄附行爲ニヨリ教授會ニ於テ教授中ヨリ選出シタル現在評議員ハ其任期中引續キ評議員タルモノトス

早稻田大學學生心得

一　早稻田大學の教旨を服膺し堅く校規を遵守すべし

一　自敬其身を修め以て品性を陶冶し德器を成就すべし

一　學業は自修を主とし務めて實力を涵養すべし

一　常に身體を鍛鍊し剛健快活の氣象を養成すべし

一　共同の責任を重んじ情義竝び盡し以て善美なる學風を發揮すべし

一　學生は校の内外を問はず常に學生證を携帶すべし

一　登校の際は制服制帽を着川すべし

一　教室に在つては靜肅を旨とすべし

一　授業中止むを得ざる事故ありて退席せんとする時は講師の許可を受くべし

一　授業前若しくは後に於て執行する點呼に對し出席者は正確に之に應答し錯誤遺漏なき樣各自注意すべし遲刻其他の事故に依り點呼に應ぜざりしものは當日中に限り其旨學生課又は受持講師に申出で承認を受くべし點呼に應ぜず又は前項の申出なきものは缺席と見做す

一　缺席者は其理由を具し（病氣の場合は診斷書を添ふ）保證人連署の上學生課に届出づべし
　但し一ヶ月を通じ缺席日數五日未滿のものに在りては保證人の連署を省略することを得

一　休學者にあらずして引續き一ヶ年缺席し又は正當の事由なくして一ヶ月以上缺席したるものは除籍す

一　學費を所定の期限内に納入せざるものは教室に出席するを許さず滯納二ヶ月以上に及ぶものは除籍す

一　總て願、届書には必ず學部、科、年、組（番號）を記入し保證人の連署を要す
　但し特に指定したる事項に在つては之を省略することを得

一　族籍、身分に異動を生じたる場合は戸籍謄（抄）本を添へ教務課に届出づべし

一　保證人を變更せんとするときは成規の用紙に必要の記入を爲し新舊保證人連署の上教務課に届出づべし
　但し舊保證人の連署を求むること能はざる場合は其理由を附記すべし

一　學生又は保證人にして住所に異動ありたる時は其都度速かに届出づべし、其の届出を怠り居所不明のものは除籍す

一　徴兵猶豫又は入營延期中のものにして入學轉學退學等學籍に異動ありたる場合は成規の期限内に市區町村長を經由し聯隊區に届出を要すべきに付徴兵事務に關する手續は遺漏なき樣特に留意すべし

一　鐵道、乘車、乘船に關する身分證明書及割引證は學生課に就き成規の用紙に所要の記入を爲し交附を受くるものとす
　夏季及び冬季休暇に際しては便宜上交附日時を指定することあるべし

一　學生證身分證明證又は汽車割引證等を毀損亡失したる場合は速かに其旨届出で再交附の手續を爲すべし
　掲示は總て學生課に就き許可の證印を受け指定の場所に掲出すべし
　濫りに掲示場以外に掲示し又は廣告物を貼付し若しくは校内に各種の引札等撒布するを禁ず

一　校内に携帶する書籍其他の物品には各自の學科年組（番號）及姓名を記載し紛失の虞なき樣常に注意すべし校内に於て所持品を紛失し又は遺留品を發見したるときは速かに學生課に届出づるものとす

一　火氣ある煙草の吹殼等火災上危險あるものは猥りに投棄すべからず

一　學科時間割受持教員の異動及休講其他緊急事項は總て學生控所に掲示す

一　試驗に關する事項は其都度之を掲示す

故總長を追懐して早稻田學園の前途に及ぶ

早稻田大學名譽學長
法學博士　高田早苗

今日は本大學の總長、此學園の大恩人たる故大隈侯爵を追悼し記念する爲めに此集會が開けたのである。只今鹽澤學長は、此會合の意味を說かれて、過去に向つて侯爵を追懐するのは勿論であるが、唯徒らに追懐を事とするのみが、此の會合の意味ではない、侯爵の意思を繼承して、將來に向つて一致團結して、此學園を盛にする、其の誓ひを立てる、是が此會合のより重大なる意味である、といふことを述べられたのは、大に私共と感を同じうする次第である。侯爵が逝かれてから既に四十餘日、此の場合に於て、侯爵を追悼し、同時に此學園の關係者たる吾々の臍を固め、未來に向つての決心を定めるのが、洵に今日の會合の趣意の最も大なるものでなければならぬと、私も深く考へる次第である。

こゝに揭げられたこのガウンは、曾て屢ゝ侯爵が身に纏はれて、諸君に向つて訓示をされた所のものである。今やガウンのみ殘つて其人は無いのである。所謂空蟬の空衣とは、此ガウンの事を言ふのであらう。徒らに此所に一着の衣服のみあつて、此中に包まれたあの偉大な體軀は、何れに向つて之を求めても、再び見る事が出來ないのである。侯爵が薨去せられて、我が日本の社會は確に淋しくなつた。殊に我が早稻田學園は如何にも寂莫を感ぜざるを得ない次第である。殊に私は、當時不幸にも病に罹つて、遂に大切なる御臨終の場合にも、側に侍することが出來なかつた。此の一事は、今にして尙深き遺憾を感ずる次第である。

昔の事を思出すと、私が初めて同志の人々と共に、侯爵に御目に縣つた當時の事が思ひ浮べられるのである。今を距る滿四十年前、雉子橋の本邸、今日の佛國大使館の在る所が其當時侯爵の本邸であつたのである。庭には櫻花爛漫と咲いて居たから、多分四月頃でゞもあつたらうか、始めて侯爵に御目に懸つた。其後數日を經て特に吾々の爲めに內宴を開き、吾々を招かれて饗應せられたのであるが、其時侯爵四十五といふ御年で、まだ〳〵血氣熾な頃であつた。侯爵夫人も卅に垂んとする位な淸楚たる淑女で御在でになつた。私はまだ二十三歲といふ一個の靑年たるに過ぎなかつたのである。當時は、大久保內務卿が沒せられて數年後の事であつて、侯爵は事實に於て內閣の首班であられた。

大隈參議の雷名は天下に轟いて、其勢力は人皆舌を卷く位であつた。其人に一介の書生が御目通りをしたのが抑ゝ緣となつて、爾來四十年、春の雨、秋の風、侯爵の指導を受けて、敎育上、政治上、微力を致した譯である。其四十年、半世紀に近い長い歲月の間、曾て一度も侯爵の門屋の外に出でたことはなく今日迄に至つたのであるから、其侯爵の御臨終の場合に側に侍することを得なかつたのは、實に千秋の遺恨である。併しながら、恰度侯爵が薨去になる凡そ二週間許り以前に、循會謝絕であるのを、特に願つて御目通りをした。侯爵は固より長い病氣で面痩れて居られた。殊に私が異な感じを持つたのは、髯の無い特色の侯爵の兩頰に白い髯が生えて、殆ど始めはほかの方かと思つた位であつた。其時侯爵は私に何を語られたかといふと、唯早稻田學園の事のみであつたのである。早稻田學園の前途に就いて色々語られたから、私は之に答へた「決して前途の御心配には及びますまい、當局者其人を得て、前途に對する內容充實の方針も、略ゝ見當が立つて居るやうでありますから、それに向つて進みさへれすれば、早稻田學園の前途は決して御心配に及ばぬと思ひまする」と申上げたら、大に喜ばれた。何でも前に理想を揭げて、之に向つて勇往邁進する事がなければ、何事も成就するものでない、それは洵に結構な事であると、大いに喜ばれた譯である。其時私に向つて、殆ど冗談半分のやうに仰せられたのは「高田君、先頃は餘程私も怪しかつたのである、殊に依ると死んだかも知れないのであつたが、今日は幸にし

て小康を得て居るが、さて死目が近づくと、死の研究をしなければならぬ、もう少し病氣が良くなつたら、死の研究を始めたいと思うて居る」。斯う言はれたから、私は「それは結構な事である、死の研究程大切な事はない、死の研究程有益な有趣味な事はありませぬ、私も此頃は少しづゝ研究を始めました」と申したら、「さうであるか」と申された。是れが侯爵と言葉を交した最後である。

侯爵が薨去せられたから、世間は侯爵に就いて種々な批評を試み、又其功績を稱へた人も少くない、是は諸君の能く承知せらるゝ通りである。殊に侯爵の鴻業として世間の人が多く賞讃したのは、一つは此早稻田大學の創立といふ事、尙一つは、早稻田に閑居せられて、世界の人に交られた、世界的交際をされたといふ點、此二點は萬口一様に褒めた所である。無論是は、侯爵として大功績の中に數ふべき事であるが、併しながら、私は早稻田大學を創立されたこと、世界的交際をせられたといふやうな事以上の侯爵の最大功績は其政治家としての功績であると深く信じて疑はぬのである。侯爵は常に言はれた、「政治は我が生命なり」と、如何なる場合にも、此言葉は侯爵が天下に向つて聲明せられた所である。また私も深き同感を寄せて、政治は實に侯爵の生命であつたと思ふ。世間少くとも一部の人は侯爵は政治に於て失敗し、教育に於て成功したなどといふ人がある。併し、私は決して其說に服する譯に行かない。無論侯爵は教育に於て成功されたに違ひないが、同時に政治に於ても非常なる成功をされた人である。一部官僚政治家の如きは大臣の地位に上つて臺閣に立ち、而して國家を支配するといふことがなければ、政治上の成功の如く思はないが、是れは洵に狹き見解であつて、假令朝に立たうが、野に在らうが、國家に對して大なる功勞を寄與することが出來たならば、之を稱して政治上の成功と言はずして將た何をか言はんやと私は思ふのである。侯爵の政治上の御功績は、實に多くして、一々こゝに數へ擧げることは出來ぬが、私は侯爵の生涯を通じて、其三大功績を諸君の前に擧げて見たいと思ふのである。其三大功績とは何を言ふか。第一は新日本の建設者としての功績である。第二は藩閥反對の中心として其橫暴を牽制したる功績である。第三は對獨開戰の廟議を決して國家の方針を誤らざらしめた大功績であると思ふ。此三つは、侯爵の生涯を通じての三大功績である、と私は思ふのである。

維新の業は、少數の人の骨折に依つて成つたものではないが、代表的人物を擧ぐれば何といつても所謂維新の三傑、西鄕、木戶、大久保、此三大人物が維新當時の中心勢力であつて、明治政府が組織された後、其中の一人なる大久保公が、比較的に長く殘つて中心を形造つて居られたのである。併しながら更に仔細に觀ると、大久保公が中心であつたに違ひないが、明治政府の初めに當つての建設事業其物に就て種々考を出し、案を立て、之を實行された其中心となるべき人は、表面は大久保公を助ける地位に立つて居られた大隈侯爵である。少くとも大隈侯爵が其勳功の分前の大部分を有つて居らるゝ人であると、私は感ずるのである。是等の

點に就てはこゝに居らるゝ澁澤子爵が親しく御見聞になつた事であるから、子爵の御竟見も伺つて見なければならぬが、私はさう考へるのである。成程當時伊藤公爵も居られた。井上侯爵も居られた。所謂梁山泊時代、鼎の形を成して、總て政務に就いての建設事業の中心を形造つて居られたのであるが、伊藤公が眞に中心人物と成られたのは、大隈侯爵退官の後であつて、其當時は伊藤井上の兩氏といふ者は、先づ補助役である。大隈侯がシテ役であつて、此二人の人々はワキ役、ツレ役であると見て差支ないと思ふ。當時外交の事は勿論、財政、產業、交通其他總て今日の新日本の基礎となる所の仕事に就いては、大隈侯爵が中心となつて、鋭意計畫をされ、實行されて茲に新日本の端緒が少くとも開かれた、其勳功は實に大なるものであると私は思ふ。

第二は前に申した藩閥反對の中心として、其横暴を牽制した勳功、世間の人は政治家の積極的功勞を認むるけれども、消極的功勞を認むる人が少い。斯くの如く、國民が偏見であつて物の見方を知らなければ、眞の立憲政治の出來上る筈のものでないのである。諸君の能く承知せらるゝ通り、英吉利に於ては、政府を陛下の政府と唱へる。と同時に、反對黨を陛下の反對黨と唱へる。ヒズ・マジェスティース・ガバメント、ヒズ・マジェスティース・オッポヂション、是れが即ち眞の立憲國民の物の觀方であると言はなければならぬ。政治を爲すのも、陛下の御爲め、政府の爲す政治に反對し、批評するのも陛下の御爲め、即ち陛下の政府であると同時に陛下の反對黨である。斯く觀て始めて立憲政治が圓滑に行はれて行く、此反對の務めといふものを國民は始終觀なければならぬ。其反對の役目、中心勢力は何人にあつたかといへば、大隈侯爵にあつたのは誰も認めなければならぬ所の事實である。成程政黨を造り、國會の開設其他の事に就いては、寧ろ板垣伯爵が大隈侯爵の先聲と觀て宜しい。又板垣伯爵が維新の元勳の一人、又最も敬愛すべき人格者であつたに相違ないが、併しながら、過去長き間の藩閥反對の中心は板垣伯に非ずして大隈侯である。板垣伯及び板垣伯の率ゐた黨派即ち自由黨は、成程政府に反對したことも屢〻あつた。又妥協したことも屢〻あつた。第一議會の終り、第二山縣內閣の當時其他妥協の行はれたことは屢〻で、其系統が今日の所謂政友會であることは諸君の能く御承知の事である。其然に至る所の因緣蓋し淺からずといつて宜しい。之に反して大隈侯爵の率ゐられた立憲改進黨、又進步黨は、政府反對の中心であつた。絕えず政府反對であつたが、其黨派がどうであらうと斯うであらうと、大隈侯爵一個人が、此早稻田に閑居して居られたる老偉人一人が、反對勢力の中心、藩閥勢力の牽制者であつて、何人も之を何如ともすることが出來なかつたことは、過去に於ての顯著なる事實である。此功績、政府反對、藩閥反對、藩閥橫暴の牽制的勳功、是れはどうしても大隈侯爵に對して國民は認めなければならぬと思ふ。

第三は對獨開戰といふ國是を決した事である。大隈內閣の當時、恰度私は外國に居つて、こゝに

居られる増田君と共に海外に漫遊して居て、開戰となつて、瑞西のゼネヴァに歸る事も行く事も出來ずして困難を極めて居つた、が其當時増田君と語り合つて、日本政府はどうするであらうかと頻にそれを心配して居つた、が、ゼネヴァに居る間に、遂にアライス即ち聯合軍と共に獨逸を討つと云ふことになつたと聞いて大いに安心した。當時日本の輿論は、矢張腹の中では獨逸の武力を恐れて居たに違ひない、一面又陸軍の軍閥は、何れも獨逸の教育を受けて居るものであるから、此戰は獨逸勝ち、英佛負けると、初めから高を括つて居つたのである。而して日本の知識階級、學者社會は多く獨逸で教育を受けた、獨逸風の學問をしたのであるから、深き同情を獨逸に對して有つて居たのである。此場合に處して、平凡の政治家は必ず局外中立と極めるのが關の山であるのに、一歩進んで旗幟を鮮明にして、聯合軍と共に獨逸を討つといふ對獨戰爭の、此國是を定めたといふことは、大隈侯の如き大度量の人、非凡の政治家が廟堂に立つ時に於て、始めて實際に行ふことが出來た譯である。其戰爭以後の日本の繁榮、故原首相の所謂五大國の一と認めらるゝに至つた事、今日又少し肩幅が狹くなつたやうでは、大分世界の猜疑嫉妬の爲に苦められて居るやうであるが、兎に角嫉妬猜疑される迄に日本の國力の伸びたのは、大隈侯爵の此決斷の賜と言はなければならぬ。

斯くの如く政治家として重大の勳功ある人であるから、其の一旦病重り、危篤に瀕せらるゝや、上、御一人が宸襟を惱まし給ひ、下、國民其の薨去を聞いて哀悼の念に打たれ、殆ど慟哭せんばかりの狀況を呈したのである。又是れだけ大勳功の有る人の終りであるから、國民の熱情が溢れて、彼の前代未聞の國民葬といふ盛況を呈したのも決して不思議はない譯であると思ふ。私は此場合に於て、國民葬と國葬の得失を論じ、何れが淋しいかなどといふことは述べない。併しながら、是だけの事は確に言ひ得る、即ち一體國葬なるものは、國民葬の如き性質を帶びなければならぬ、國民の死者を痛み、死者を惜む熱情が現はれるのでなければ、眞の國葬とは言へない、將來の國葬は國民葬的國葬であつて欲しい、官僚的國葬であつては欲しからぬといふことだけは言ひ得ると思ふ。其國民葬といふ一つの特色ある葬儀は、葬儀委員たる市島君、増田君其他の人人の段々考へられた結果であらうと、私は深く今でも感謝の意を有つて居るが、是はどういふ事から思ひつかれたか知らないが、確にヒントを得られたのは、彼の英國の老偉人ウィリャム・ユワート・グラッドストーン翁のウェストミンスター・ホールに於ける所の國葬、五十萬の人が會葬したといふ、あの國葬是にヒントを得られたものであらうと思ふ。グ翁の國葬たるや、私の所謂國民的國葬である。未來の日本國葬は此グ翁のウェストミンスター・ホールに於ける國葬の如くならんことを希望する。グ翁といふ話が出ると、私はグ翁と大隈侯の比較といふことに思ひを馳せざるを得ない、大隈侯が薨去されると色々な批評が出て、又西洋の大政治家と比較する評論も大分新聞雜誌の上に見え、多くの人は、此グラッドストーンと大隈侯といふ比較を爲された樣に思はれる。

内ケ崎教授の如きはゼファーソンと比較されたのを雜誌の上で見た。それは人々の考で、色々の比較があつて成程グ翁は大隈侯と似た所が多い。國民の大多數に熱愛された點、グランド・オールド・マン、彼れは英國の老偉人是れは日本の老偉人、此グランド・オールド・マンと國民に呼ばれた點、又政治家にして著述家、著述家にして政治家であつたといふ點、又高遠なる理想を抱いて、之を實現しようと試みたといふ點、是等の所を比較すれば、確にグラッドストーンと大隈侯は類似の點があるに相違ないが、私は其兩者の性格は大分異つた所があると常に思つて居るのである。

私は、大隈侯はグラッドストーン其人よりも寧ろロード・パーマーストンに似て居ると考へて居る。愛蘭の貧弱な一貴族より身を起して、丁度大隈侯が佐賀の一士族より身を起したと同じ樣な譯で、遂に英吉利の名外務大臣と言はれ、自由黨内閣の名宰相と呼ばれた此パーマーストンに似て居る所が仲々多いやうに思ふ。どういふ所が似てゐるかといふと、第一に愛嬌のある所が能く似て居る、第二には磊々落々として小節に關はらぬといふ所が似て居る。グラッドストーンは正直一方の人で、非常に嚴格な人であるが、パーマーストンに至つては、愛嬌のある老人、磊落不覊な人であつた。此點は餘程大隈侯に似て居る。あの雄辯宏辭四隣を驚す談論、是も兩者誠に能く似て居る。

又殆んど傍若無人と思はれる程の目ざましい對外的外交をやつたといふ點も、大隈侯とパーマーストンとは、餘程能く似て居る點があるやうに私は思ふのである。又八旬に越えた所の老翁でありながら、内閣の首班として政務に鞅掌せられ、矍鑠として毫も元氣が衰へなかつたと云ふ點も侯爵に能く似て居る。唯パーマーストンは大隈侯に及ばざる所が多い、大隈侯は大なるパーマーストンであつて、パーマーストンは稍小なる大隈侯であつたと私は思ふ。又尚ほ似て居る所、似て居ると云ふよりも一寸運命の惡戲とでもいふべき所に斯ういふことがある。御承知の通り、パーマーストンは、佛蘭西の大統領であつたナポレオン三世を助けた。或る意味でいふと、一種の山師とも稱す可きナポレオン三世は、此パーマーストンの力に依つて、遂に帝位に卽いたのである。是れについては、英女皇ビクトリア陛下は非常に御不服であつたけれども、パーマーストンはどういふ考か、此のルイ・ナポレオンの佛蘭西の天子たることを認めた。大隈侯爵は其反對で、支那に於て、これも亦多少山師的の彼の袁世凱が天子にならうとした時、大隈侯は時恰も内閣の首班にあつて、遂に之を抑へて天子たらしめず、それが爲めでもなからうが、袁世凱は遂にあの世の人となつたのは諸君の御承知の通りである。是は似て似ざる點であるが、兩者を比較すると、一種の興味を感ぜざるを得ない。パーマーストンは雄辯宏辭の人、大隈侯も亦雄辯宏辭の人であつた。

パーマーストン一代の大演說に、ドン・パシフヒコ問題の演說といふのがある。其演說は隨分

長い演說で、今日の夕方から明日の明方まで、一人で饒舌り續けたと云ふ長い演說である。英吉利の議會は午後の四時といふに開いて、明日の朝まで議論があれば續けると云ふ卽ち夜の會である。今日の點燈頃より翌日のしらく明けまで續いたと云ふ有名なる大演說である。ドン・パシフィコといふたしかモロッコあたりに生れた猶太人で、ジブラルタルで育つた時に、英吉利に轉籍して、英吉利の國籍に入つて居る。それがアテネへ行つて商賣をして居る時、アテネで一揆の爲に襲はれた、さうして非常に損害を受けたといふので、其損害を希臘政府に拂はせようとしたが中々拂はぬ。パーマーストンはそればかりではない、種々前後の關係もあつたのであるが、大いに憤つて軍艦を差向けて、遂に希臘政府を壓迫して償金を拂はしめた。是れが爲めに利害關係のある佛蘭西は大いに怒つた。又是れが爲めに利害關係ある露西亞も大いに憤づて、將に國交上の危殆を來した。餘りに遣り方が弱い者苛めだ、其位の事に軍艦を派遣すると云ふことは不都合千萬だと云ふのが英吉利の國內に於ける反對黨の攻擊だ。其時にパーマーストンは一場の演說に依つて、遂に其反對黨の攻擊を抑へ付けた。

卽ち今日の夕方から明日の朝までの演說をやつたのであるが、其最後の言葉はどういふのであるか、それをこゝに擧げて見る。

Whether, as the Roman in days of old held himself free from indignity when he could say, 'Civis Romanus Sum.' So also a British subject in whatever land he may be, shall feel confident that the watchful eye and the strong arm of England will protect him against injustice and wrong.

「昔し羅馬人は『我は羅馬市民なり』、斯う言ふと何處の人間も皆恐れをなして無禮を加へなかつたのであるが、今日苟くも英吉利の臣民は、世界何れの端に居ようとも、必ず英國の注意深き眼、英國の强き腕が彼を保護するといふことに付いて安心させなければならぬ」と最後に獅子吼したのである。此獅子吼の爲に反對黨も此內閣に一指も加へることが出來なかつた。これパーマーストン三寸不爛の舌の大功名である。大隈侯爵が、外務大臣の時に、私は其時侯に從つて外務省に居たが、布哇に於ける日本移民の問題で軍艦を送つたことがある。反對黨は大分嘲笑を加へたのであるが、大隈侯の心はパ卿と同じことであつたに相違ない。Civis Romanus Sum（吾人は羅馬市民なり）、この考を抱かれたればこそ、日本の移民を保護する爲に軍艦を派遣することになつた。不幸にして日本の議會は進步して居らぬ、日本の議會の議員の多數は、名演說を聽く耳を持つ人が尠ない樣に思ふ。それが爲に大演說と云ふものが、上院下院に於て餘り多く聽かれたことがない。大隈侯の雄辯を以て、若し聽く人があつたならば、今日の點燈頃から明日の拂曉まで衆議院の議場に於て、雄辯を振はれてシビス・ローマヌス・スムを叫ばれたに相違ないが、惜しいかな、

侯爵に此機會を與へなかつたのは、抑〻是れ誰の罪ぞやと、諸君と共に不足を言ひたいと思ふのである。要するに隈侯とパ卿とは類似の點が多い、併しながらパーマーストンは、所謂高遠の理想が無い、又パ卿は嘗て一度内務大臣たりし時に、「予は學ぶ爲めに來れり」といひしが如く、外交以外政務には餘り通じない人であつた。その點に至ると、外交のみならず、財政、教育、産業、交通、如何なる政務にも通曉された大隈侯には遙に及ばぬのである、是れ私が、大隈侯はパーマーストンの大なるもの、パーマーストンは大隈侯の小なるものといふ所以である。

私の話は段々脱線をして來たが、併しながら今一言大隈侯のことについて諸君に申上げたいのである。如何にも侯爵は親孝行の方であつた。是れは諸君が能く記憶されたいと希望する。侯爵が教育上に功勞あり、政治上の功勞があるとしても、此親孝行といふ事實がなければ、侯爵の價は半ば下落するのである。然るに侯爵程の親孝行の方は餘り世間に見當らぬと言つて宜しい。恰度九十に近き齡でなくなられた御母堂生前に對して孝養を盡されたことは、苟くも大隈家の門を潜つた者は何人もよく知つて居る。又大隈侯爵に似合はしからず、あの邸の一隅に社がある、餘り大きくはないが、社がある。何の爲めに此社があるかといふと、侯爵の御母堂が生前に於て敬神家であつた、其爲めに建てられた社である。其社が今でも依然として存して、侯爵は常にそこに參詣される。又侯爵は御病中に――此間親近の人から聞いたが、此病中の爲めに久しく音羽に參詣しない、久しく御無沙汰をして居ると常に此事ばかり氣にされた。音羽とは何ぞや、卽ち御母堂の墓のある所である。侯爵の親孝行は誰もよく知つて居ることである。此に於て始めて至誠の人を見る。侯爵は大政治家でもあつたらう、大教育家でもあつたらうが、夫れよりもまして殊に至誠の人であつた、至孝の人であつたといふことは、如何にも侯爵に對して我々の欽慕の情を深くする次第である。此點は豐臣秀吉に能く似て居られる。豐臣秀吉は、日本が始まつた以來の大豪傑大英雄であるが、其母に對する孝心の深かつたこと、孝行の念の厚かつた事は歷史上明かである。或は多少私の記憶が違つて居るか知れぬが、たしか朝鮮征伐の眞最中であつたかと思ふ、九州の名護屋迄行かれて、遙に三軍を指揮されて居た時、大政所の病篤しといふことを聞かれて、あわてふためいて歸られ、看護に手を盡された。而して其大政所がなくなられた時には、子供の如く慟哭されたといふ、是れは秀吉の一生の歷史の中の最も美しい點であると私は思ふが、其の點に於ては、大隈侯爵は、豐臣秀吉に誠によく似て居られる、實によく似て居られると、私は常に思つて居る。

此大偉人、而も至誠の人、今や卽ち亡し、空しく此ガウンのみ遺つて居ると云ふ譯である。此ガウンは大正二年に三十年祝典を、私が學長として擧げる時にあたつて、始めて此式服と云ふものを制定したのである。其時は御承知の通り、世界の大學皆祝詞を贈つて、我大學の三十年に達

したことを賀せられたのである。あすこの大運動場に殆んど三萬と云ふ大衆が集まつて、此學校の前途を祝された、その時に式服の制を定めたのである。此の深紅の服を總長の式服と定めて、之を獻じた所が、總長は之を纒はれて、子供の如く喜ばれて、「オレは大僧正になつた」と言はれたのであるが、其喜ばれた人今や卽ち亡しといふ次第である。然しながら先刻鹽澤學長の言はれた如くに、大隈總長は此ガウンを着て諸君の前に立つて、常に何を言はれた。女々しく過去を悲しめよと言はれたか、大隈侯爵は常にさういふことを諸君に教へられた筈はないのである。大隈侯爵は絶えず前途を眺められたのである、先刻病床に於ての御話のあつた時に申した如く、前途に理想を置いて、是に向つて勇往邁進せよといふのが、總長が此ガウンを着て諸君に常に教へられたことである。我々早稲田大學の學徒、此總長の敎を奉じて、過去は過去として葬り去り、未來に向つゝ此學園の發達、此學園の發展を計つて、總長の志を空くせざらぬやうに致し、總長の遺志を繼承するを以て最大責務としなければならぬ。此所に集まられたと集まられざるとを問はず、早稲田大學の敎職員校友及び學生諸君は、今後一致團結協力して此總長の心を以て心とし、此學園の繁榮發達を計られんことを、深く私は希望する次第である。

過般來段々聞く所によると、此大學の學長始め幹部の方々は、其の邊に就いて大いに考へる所があられる。內容充實、精神上學問上敎育上の內容充實、設備上の內容充實、是等に就いて段々調査を遂げられつゝある。此調査の結果は來るべき四十年祝典、此秋に於て催さるべき四十年祝典に發表せられ、其後十年を期して五十年祝典の時までに之を實現するといふ。斯ういふ計畫が今頻りに企てられつゝあるから、諸君が其を耳にする日は蓋し遠くなからうと思ふ。大發展をする、大繁榮を計るとした所で、其の目的を定め、計畫を立てゝ、それに向つて勇往邁進しなければならぬのであるが、幸にして其成案は今や成らんとして居るといふことである。此計畫を成就する、十年を費して一の事業を經營することは、必ずしも難事でない。私ども早稲田學園の經營に任じた日に於て、自から爲した所に徵して見ても、其實に徵して見ても、決して難事でないのである。兎に角諸君は今後志を一にして、此會合をして有効なる最も意義ある會合たらしめ、侯爵を記念して、前途に向つて發展を計る門出たらしめると云ふ心を以て、此學園の繁榮に協心同力、戮力されんことを深く期待し、而して此追悼の演說を終らうと、斯様に考ふる次第である。

（大正十一年二月十九日早稲田大學校庭に於ける大隈侯爵追悼會當日の演說）

故大隈侯爵と其二大競爭者

早稲田大學名譽學長
法學博士　高田早苗

左に掲げたるは追悼會の當夜、永樂倶樂部に於て開かれし晩餐會席上、高田名譽學長の卓上の演説なり。彼是照合の便宜の爲にこゝに載することゝせり。

段々諸君の御話があつた。のみならず私は、今日の晝間、早稲田大學のあの追悼會に於て、侯爵のことについて大分長く感慨を述べたから、今此所に立つ必要は少しもないのであるけれども、一寸諸君に此機會に於て御願をして置きたいことがある爲めに、極く簡單に一言することの御許を願ひたい。諸君は如何御考へになるか知らぬが、私の考ふる所では、侯爵一代の上に於て、侯爵の競爭者が二人あつたと思ふ。政治上に於ては何と申しても伊藤公爵であつたやうに思ふ。又教育上に於ては、福澤諭吉先生であつたやうに思ふ、此二人は毛に角侯爵の競爭者と見て宜しいのであつて、唯侯爵が此二人を一度に競爭者とされ、政治上、教育上に於て競爭されたと云ふとは、何れがより大であるかといふ事を決する重大なる問題になるやうに考へる。何といつても、明治時代は大隈伊藤の競爭時代である、此競爭が又一番見るに足る所の競爭で一大偉觀と申しても宜しい様に思ふ。私は平素考へて居る。凡て力量に於ては、大隈侯爵程大力量の政治家は殆んど無い、少なくとも、維新以來無いと思ふ。此力量の點に於ては、或ひは維新の所謂三傑も到底大隈侯と匹敵でないと平素信じて居る。其力量は偉大であつたが、大隈侯爵は角力の上手な方かといふと必ずしも上手といへない。隨分場合に依ると力任せに角力を取られたやうに思ふ。之を譬へて見ると、大隈侯爵は常陸山の如き角力振である、伊藤公爵は梅ヶ谷の如き角力振である。常陸山は勝たんとして角力ふ、梅ヶ谷は負けまじとして角力ふ。故に屢ゝ引分を取つて晩年頗る振はなかつたのである。此違ひは確にある、力量に於ては常陸山遙に梅ヶ谷の上である、併しながら梅ヶ谷は理詰の角力を取り、常陸山は屢ゝ强引に行くといふことは、角力の見巧者の能く說くことである、恰度此兩者を以て大隈侯を評し、以て伊藤公を評することが出來ようと思ふ。是れを歴史に徵すれば、大隈侯は不識庵である、伊藤公は信玄其人であらう、機山其人であらうと思ふ。是れだけの違ひはあるが、何れが何れとも言はれない、毛に角明治時代の二大政治家、此二人の爭、二人の競爭は我々子供の時から見て飽かなかつたのである。

私が早稲田大學を經營する時に當つて、明治三十五年、之を大學としたいと云ふ考を起して、自ら揣らず、其局に當つた時に斯う思つた、我々は無論大隈侯幕下の一人であつて大隈侯の世界

は我々の活動する世界である。併しながら大學を造るといふには、日本半分の贊成を得たのでは造り得ない、他の半分の贊成を得なければならぬが、それには伊藤公の贊成をどうしても必要とする、斯う思つたのである。故に大隈侯の理解を得て、單身紹介も何もなく伊藤公を訪うて段々大隈侯のことを説き、早稲田大學の趣旨を話した所が、伊藤公大いに喜ばれた。「俺と大隈とは固より親友であつたが、不幸にして中頃分れて今に至つて居る。東京專門學校のことも大に誤解して居たのであるが、段々其後に諸君の爲す所、今日の有樣を見て、其誤解を悟つて居る。宜しい、一臂の力を添へよう」と云ふ所から、自から寄附もされ、諸君も御承知であらうが、明治三十五年に於て、東京專門學校が大學と銘を打つて、早稲田大學と稱して現はれた時に、伊藤公親しく來つて大隈侯と握手して、さうして早稲田大學の校賓たることを承諾せられ、一場の演説を試みられたといふ譯である。其以來私は、活動に非常な便利を得たのみならず、伊藤公と大隈侯の間柄も妙なもので、其以來は段々融和されて、昔の親友が再び手を握つたかの如き感があつたのは、私の大いに滿足して居る所の事柄である。

是は政治上の話である。それが敎育上となるとどうであるか。東京專門學校が早稲田大學となつた當時は、福澤翁は既になくなられて居られた。而して慶應義塾はあまり盛大では無かつたのである。私が第二期計畫で理工科を造るといふことを種々奔走した時代には、慶應義塾はまだ其方面は何事も爲して居らなかつたのである。理工科などといふものは、慶應義塾が先鞭を着けべきものであると思つたが、蓋し早稲田大學が先鞭を着けたのを多少遺憾として居つたかと思つた位である。ところが今日はどうだ、早稲田大學の工科に匹敵する醫學部が出來て、堂々たる勢を以て今進みつゝある。今日の慶應義塾は、早稲田大學が決して是に劣ることはないが、一時の微々たる勢に似ずして、今や勢力伯仲の間にある。天下の英雄君と我といふ程度の關係になつて居る。是は福澤先生亡き後に此勢が出來たのである、現に早稲田大學が大學組織になつた當時は、到底是と匹敵すべき勢がなかつたと思ふのに、今日は伯仲の間にある。斯ういふ事である。而して今や早稲田大學は其總長たる大隈侯爵を失つたのである。此侯爵を失つた後に於て、此早稲田大學、早稲田學園の進歩發達が鈍るといふことがあつたならば、早稲田大學校友諸君は、何の顔ばせあつて、故侯爵に見えることが出來ようか、こゝを諸君は、深く御考を願ひたいのである。私どもは、御覽の通り、頭は白皚々といふ樣になつて、前途どの位の長さがあるか、私は早稲田大學の五十年祭迄は生きて居る積りである。三十年の祝典の時に侯爵に此事を申上げたらば、「君も我輩の樣に、大分年齡の點に就ては慾張だな」と言はれた位な次第であつた。此老骨前途どの位大學の爲めに盡されるか分らぬが、餘命のあらん限りは盡す積りである。

然しながら、深く希望する所は諸君の御努力にある。先刻東京に居られる校友の一人たる降旗

君が、大學の前途、其事業の前途について大に慷慨せられた。又松岡君が地方校友を代表して同様の意味のことを述べられた。私は頗る心強く感じたのである。先づ差向き大隈侯爵を記念する事業を起さなければなるまい、それが矢張り、早稲田大學の内容充實といふことになるのであるから、侯爵の記念事業として何事か爲さなければならぬと思ふ。又先刻も早稲田の校庭に於て申したる如く、當局者は孜々として調査に從つて居られる。內容充實、學問的教育的の內容充實、又設備的の內容充實、其調査が出來れば四十年祝典の時に之を發表し、其後十年を期して五十年の祝典を擧げる迄に其實蹟を擧げたいといふことになつて居る。私の考へる所では、少くとも五百萬圓、多ければ千萬圓、金だけでもこれだけ無ければ、此事業は出來ぬのであるが、差向き故侯爵の紀念事業と云ふものを、必らず當局者は考へられて我々に諮られることは、蓋し遠き未來ではあるまいと思ふ。どうか是等のことを諸君はよく記憶せられて、又よく其點について御考へ下されて、どうか十分なる御助力を賜はり、慶應義塾が福澤先生亡き後に發展した、あの事業に徵して、早稲田大學も、大隈侯爵亡き後も、益々發展を續けて五十年の祝典を擧げる時には、內容も充實して、名に於ても、實に於ても、眞の大學となり、帝國大學、慶應義塾、是等と匹敵して一等地を拔き、是に優るとも劣ることのないやうに致したいものである、と切に考ふるために、此機會に於て諸君に訴ふる次第である。

大正十一年三月卅一日印刷
大正十一年四月三日發行

東京市牛込區白銀町二十九番地三十五號
編輯兼發行人　前田多藏

東京市牛込區榎町七番地
印刷者　渡邊八太郎

東京市牛込區榎町七番地
印刷所　日淸印刷株式會社

府下豐多摩郡戸塚町字下戸塚六百四十七番地
發行所　早稲田大學

45268

終